残虐で優しい聖女（改訂版）

オミズ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるところに少女がいました。

その少女は髪も肌も、この世の醜さを一切受け付けないような【白】でした。

だからこそ少女は叶わないと知っていても【＝】をもとめました。

これはそんな少女の成長の物語。

目次

第1話　村娘 ―― 1
第2話　幸福には不幸が憑きもの 13
第3話　交差 ―― 21
第4話　本題 ―― 28
第5話　落ちる意識 ―― 36
第6話　腐れ縁の邂逅 ―― 44
第7話　出会い ―― 50
第8話　効率の良いお悩み処理法 60
第9話　場を掻き乱す術士 ―― 68
第10話　決別 ―― 79
第11話　代償つき ―― 86
第12話　魔法特訓ただ傍観 ―― 98
第13話　初めて ―― 108
第14話　忌むべきもの ―― 126

第1話　村娘

遠い昔――世界は数百、数千という国々が所狭しとひしめき合っていたという。
その多くは大戦を生き延びた人・魔・獣、といった代表的な種族の国だった。
だが、何事にも例外というものはあるもので、上記3種族（現、大種族）に属さない者達の国もあった。
その中に、見た目、運動能力、言語、その全てが人と寸分違わぬ種族がいたそうだ。
彼らと人とを分ける基準はただ一つ。
【異常なまでの献身】
彼らは人と同じように死を恐れ、喪失に嘆き、不条理に憤る。
だが、人が死に瀕した場合に限り、彼らは全ての人間らしさを排除する。
代わりに生まれるのが、ただ一つの意思。
何をしてでも救う。
「―イ…」
彼らはその性質上、可能であるのなら、あらゆる窃盗、あらゆる殺戮、そして……自殺すら許容した。

そんな彼らに救われたものは多くいたはずだ。
「――…リッ」
だが、愛すべき破綻者である彼らについて書かれた書物は決して多くはない。
それには理由があると私は睨んでいる。
「イリッ!!」
「はいッ!!?」
耳元からの大音量に驚いた少女は、つい先程まで熟読していた本を手放した。
報復とばかりに、本は無慈悲に少女の膝に直撃し、木葉色の床に転がる。
その表紙にはこう書かれていた。
『知られざる種族の謎』
また渋いのを読んで…と、少女を呼んだ女性は嘆息する。
その仕草を勘違いしたのか、みるみるうちに顔を蒼く染め上げる。
「す、すみません」
出たのは謝罪の言葉。
その固い態度に悲しくなる時期は過ぎた。
ただ、引き取ってから3年も経つのに、一向に態度が変化しないのは物悲しくもある。
そんな私情は、心の中だけに留めておけているだろうか?

表情に出たりはしていないだろうか？
そんな意味の無い自問自答を続ける生活に慣れたのは、女性が良い意味でも悪い意味でもあっさりとした性格だった事が大きい。
そうでなければ今頃、怒りのあまり少女を虐げるか、悲しみのあまり滂沱していただろう。
「気にしないで頂戴。それよりもイリ、少し時間あるかしら？」
「はい。何か御用ですか？」
打てば響く返事――といえば聞こえは良いが、響かなかった事など一度たりとも無かった。
むしろ…酷い話だが、響かない事を望んだときも多い。
そんな小さな感傷を懐くことも時が経つことで減ってしまった。
「このお弁当…お父さんが忘れて行ったみたいだから届けに行ってくれない？」
返事は聞かなくても分かる。
「はい」
表情や声色は豊かなのだが、応えることが変わらない。
いつだってこの少女は機械の様に返事をする。
「では、行ってきます」

ぺこり、と一礼。
その様子がなんとも愛らしい。
そう…愛らしいのだ。
親の贔屓目かもしれないが、この白い少女は非常に可愛らしい顔立ちをしていると思う。
生真面目そうにキュッと結んだ桜色の唇。好奇心に満ちたくりくりとした大きな銀色の目。彼女の性質をよく表した綺麗な笑みを浮かべる口元。
同性ですら惹き付けるその魅力は、この村にいる間は美点になるが、出た瞬間欠点にしかならない。だが、生まれ持った資質は切り離しようが無い。
だからこそ、ここにいる間に使い方を身に付けて欲しいのだが……今のところ、そんな気配は全く無い。
「はぁ」
悩みのタネが多いせいだろうか？
思わず零れた溜め息に苦笑する。
まだまだ自分は若い。そう思っていたけれど、案外若くもないのかもしれない。
たった今出かけて行った少女の姿を思い出す。
昔はあのくらい元気に動き回っていたものだ、と。

その思考こそが、年をとった証だという事には女性はまだ気付かない。

ぽかぽか、と暖かい日差しに照らされながら少女は歩を進める。
時刻は昼前。ちょうどご飯を作り始める時間帯で、村のそこかしこから良い匂いが漂ってくる。
その匂いを楽しみながら鼻歌混じりに進んでいく。村の外れ、村の外れへと。
家々が立ち並ぶ地帯を抜けて、作物が背伸びする大地も抜けて、辿り着くのはだいぶ朽ちてきた木製の看板の前。看板には『これより外界。モンスター注意』と書かれてい

る。

ここは目指す場所ではないのだが、イリはいつもここで一度止まる。

左右を見渡して人目が無いことを確認する。

「モンスターさん。いますか？」

呼びかけるのは看板を無視した内容。だが、毎度の如く少女の望む存在は姿を現さない。

今回も同じで、数十秒待っても反応は無い。

はぁ、と溜め息を吐いてその場を立ち去る。

テクテクと歩くこと数分。日が中天に座した頃、少女は養父の元に着く。

村の建物のなかでもかなり薄汚れた建物で、もし初めて村に訪れる人がいたら絶対ここには寄らないだろう、と思わせるほど汚い。

そんな建物の中で養父はいつもの様に鉄を打っている。その横顔は建物とは正反対で、とても美しいとイリは思う。

美しい、と言っても単純に養父が美形だという訳でもなく、上手く表現できないが、生物に備わっている【美】が収束したからだと思っている。

いつかキチンと説明できる日が来るのかな、と思いつつ養父の仕事が一段落するのを待つ。

5分程経ち、養父は額の汗を拭って笑った。
「何か用かい？」
どうやら弁当を忘れた事に気付いていないらしい。
先程までの鋭い瞳を綻ばせて、穏やかな瞳になった養父を見て、ワザとらしく溜め息を吐く。
「忘れ物ですよ？分かりませんか？」
煤で汚れた周りを見て、次に同じく煤で汚れた自分を見る。
「…清潔感、かな？」
「お弁当です」
くだらない返事を叩き切ってお弁当を突き出す。
養父は頭を掻きながらそれを受け取る。その所為で髪の毛から煤がぼろぼろと落ちてきてイリに直撃した。
「……」
イリは光の無い目でジッと見つめ、養父はにっこりと笑ってそれを受け止める。
そんな痛々しいほどの静寂は、そう長く続かなかった。
「それじゃ、お弁当ありがとね。仕事があるから帰ってて」
いっそ清々しいくらいに水に流そうとした養父に、イリはただニッコリと笑った。

「それで済むと思っていますか？」
その声はまるで神託を告げる聖女の様。
それを受け止める男は頭を垂れた。
「思ってる」
「んなわけないでしょうがッ!!!」
怒髪天を衝く。うねうねと宙で己の髪を蠢かせたイリは叫び、養父に詰め寄る。
その美しい体のあちこちに黒い汚れが付着して、常人以上に不潔そうに見える。
「この服真っ白なんですよ!?黒い煤なんて付いたら目立ちますよ!!」
零さないように必死で銀の瞳に雫を溜めている少女を見て、男は手を叩く。
辺りを見渡して、目的の物が見つかったのか、怪訝そうな少女の視線をものともせずに一直線に向かう。
手におさめたのはちりとり。
そんなもので何をするのか、といつの間にか泣き止んだ少女は興味津々で見守る。
養父はそこらじゅうに積もっている煤をかき集めると、脈絡もなくイリに放り投げた。
「うえ!?…げほっげほっ!!!!」
当然、反応出来ずに全身に満遍なく煤がかかったイリは酷く咽る。

そんな少女に向けて、アホな養父はこう言った。

「真っ黒にすれば目立たなくなるよ」

「なるほど!!!」

アホなのは少女もらしい。

賛同の意を示した直後、地面に寝そべってゴロゴロ転がり始めた。

あはは〜、とそれをほんわかしながら観察する養父。なんとも平和なものだ。

結局、イリは飽きるまで転がり続け、そのまま家に帰ったら養父共々怒られた。

太陽が隠れ、魔の者共が蠢き始める夜中。
少女はボロボロに擦り切れた本を取り出した。
タイトルは読み取れないが、内容はジッと目を凝らせば読み取れるくらいには薄れていない。
そんな古めかしい本をパラパラ、と慣れた様子でめくり、いつも通りのページで指を止める。
そのページの章は【大種族の格差】
内容を暗記するほど熟読した。だが、それでも毎日のように読む。
そこに憤りたくなる現状が、嘆きを覚えずにはいられない現状が記されているから。
少女は確かめるように字を指でなぞる。

さて、ここで大種族と呼ばれる、人・魔・獣、の３種族に着目してみよう。
この３種族が、なぜ大種族と呼ばれるのかは存じていると思う。現在、この世界に３種族以外の国が存在しないからだ。
さて、そんな大種族だが国内状況には格差がある。
まずは人。人はこの世界の緑溢れる土地の大部分を所有している。国土の面積で言えば二位だが、人口が一位なのは、肥沃な土地のおかげで基本的に飢える状況に追い込

まれないからだ。

次に魔。魔は国土そのものいえば一位だが、その大半が荒れ果てた土地だ。そんな厳しい環境に関わらず、魔は人口が二位であるのは、基本的に食事を必要とせず、地面から魔力を吸い上げるだけで生きていけるからだ。

最後に獣。国土も人口も3位である彼らは一番苦しい状況にあるといえるだろう。人よりは強靭だが魔よりは貧弱な肉体。それなのに国土に緑が見える場所は少なく、食事をとらなければ生きていけない。だから、必然的に国民も痩せ細っている。

【必然的に国民も痩せ細っている】

この部分。この部分だけは我慢がいかなかった。

イリは自身のふっくらとした手を見る。櫛がスッと通る髪を撫でる。スベスベとした服を触る。

それら全てはイリの現状を表している。即ち――裕福だという事を。

獣――彼らが望んでも得られないものを、私は何の努力もせずに手にしている。

彼らが貧困に喘いでいる間に、私は幸福を得ている。

何て罪深いのか…。何でこの世界は平等ではないのか…。

そっと本と疑問を棚に戻して、ふかふかのベッドに寝転ぶ。

既に養父養母は眠ったのだろうか？眠る前に世界の秤の傾きを嘆いただろうか？
そんなこと知る術は無いけどそうだったとしたらいいな、と願い少女は目を閉じる。
【何故この世界は平等ではないのか？】
たった一つの疑問を置き去りにして。

第2話　幸福には不幸が憑きもの

「おいッ!!どこ行った!?」

パチパチと焼ける音に混じって怒声が響く。奇妙なほどゆっくりと近づいてくる足音に、泣き出しそうになる目を何度もこする。叫びだしたいほどの恐怖を押さえ込んで、ただジッと幸運を祈って息を潜める。

暗くて怖くて、だけど一日の終わりに安心する筈の【夜】は、今は何者かの所為で怖くて怖くて、とっても怖いものに変わってしまった。

現状を悔いるわけでもないのに、こうなった原因が何にあったかを思い返す。

悪者達は親友を玩具にするために捕まえた。その瞬間の諦めに染まった瞳が嫌で、無策で飛び出した。その事は後悔はしていないけど、反省はしている。

もっとしっかり考えてから飛び出せばよかった。考えなしに飛び出したから僕は追われ、親友は捕まったままだ。

回想を打ち切って、近づいてくる足音と怒声に怯える心を落ち着かせる為に、護身用の短刀を鞘から抜く。煌く刃は新品同様。近くの壁で試し切りをする。使う事態にはならないと思うけど、念の為だ。いざという時に使えなかったら元も子もないのだか

ら。

「ッ。そこかぁっ!!!」

裂帛の声に導かれるように、炎の弾が僕の脇腹を掠めて、ジュッと嫌な音を立てる。

（何でバレた!!?）

混乱する頭はすぐさま理由を求めようとする。だけどそれじゃダメなんだ。今一番大切なのは一秒でも速くアイツの視界から逃れること。皮膚の焼ける痛みに呻く事と重要な疑問の解明に費やす時間は無い。

急いで飛び出した足に履物は無くて、一歩一歩にイタイいたいと騒ぎ立てる。夜の暗闇を引き裂いて次々と襲い掛かってくる焔は、僕に休憩を与えない。

それでも、それでもただ生き延びる為に全てを無視する。

全神経を使って、背後から飛んでくる火の玉をしっかり見据えて、その全てを回避する。だけど、逃げることはやめずに、足だけは機械的に動かす。

だけど、大事な局面なのに先程の出来事が脳裏にチラつく。

天に向けて許しを請うように手を伸ばしている黒焦げの人形を見た。

小さい何かを抱きしめて蹲ってる黒焦げの人形を見た。

小さい…僕より小さい、とても可愛かった生焼けの人形を……。

「あっ」

気付いた時にはもう遅い。
無様に束の間の滞空と絶望を味わい、情けない音を立てて僕は転んでしまった。
それは所謂ＤＥＡＤＥＮＤ。最低最悪な結末が嗤って待っている筈だった。
ここまで言えば分かるだろ？
ならなかった。最悪な結末にはなったが、最低にはならなかった。
少なくとも、俺の中じゃ……

慣れない明るさに目を開く。

そこには、目が痛くなるほど蒼い空。太陽の恩恵を享受して青々と生い茂った草花。
その全てが見慣れなくて――否、色彩が濃くて目がチカチカする。
そんな中でも、ミスを犯さない為に依頼書（強制的）を透かし見る。

『依頼』
聖女を保護せよ。居場所は同封してある地図を参照。そこで少女を捜せばよい。

素晴らしい手抜き。だが、必要な事柄は全て書いてある。
変に長ったらしいものよりはよっぽど好みだ。
手の中で依頼書をもてあそびながら考える。
それにしても、少女…ねえ。聖女というのは、もっと成熟した女かと思ってたんだがなぁ。
保護する対象としては、少女というのは面倒臭いもんだ。幼いと思考が読み辛い。だからこそ、無意識の内に、聖女というのは成熟した女だ、という考えをしていたんだろうが…。
もっとも、聖女というからには、常人には理解できない思考回路をしてそうだがな。
「はぁ～面倒臭い」

年端もいかぬ少女が対象。しかも、市販の地図には書かれていない村に在住ときた。
仕事だから一切の手抜きはしないが、なんとも後ろ暗くて面倒臭そうな依頼だ。そうぼやいても何か変わるわけがないが、ぼやかずにいられようか？
せめてもの反抗で、依頼書をくしゃくしゃにして懐に仕舞う。
それを待っていたかのように、薄暗い森の中から理性無き『魔』の姿が現れる。そいつらは全身が黒く、木々がつくる影のせいで輪郭さえつかめない。そんな奴らがぞろぞろと集まってくる光景は、中々に不気味なもんだ。
寝ている間に来なかったのが不思議だったが……。おそらく、単身では俺に勝てないとふんで、数で潰そうとしていたのだろう。
俺は有象無象に遅れをとる程弱くはないが、処理が果てしなく面倒臭い。これだから半端に知恵があるやつは嫌いなんだ。
と、いつもなら思うんだが、今回に限っては良いタイミングだ。
まさか、ギャアギャア五月蝿い『魔』が蔓延っているのに感謝する日がくるとは思わなかった。
せいぜい憂さ晴らしに使わせてもらおう。意識を切り替えながら刃を抜く。
さて、何分俺の遊び相手がつとまるかな？
おっと、目的の村まで後一日。

遊ぶのもいいが、それまでに捕縛プランを練っておくことも忘れずに…だな。

朝。太陽が大地を照らす。
それは、あまねく理性ある生物にとっては恩恵になり、あまねく理性なき生物にとっては弊害になる。
『獣』は長い一日の訪れに嘆き、『魔』は短い一日を見送る。
そして『人』は……
「おはようございます!!」

…長い一日を祝福する。

「おはよう、イリ」

のどかで平和な村の一軒家。

そこで、朝のささやかな営みが築かれていた。

「今日は何か手伝うことはありませんか？」

村で採れた野菜を使ったスープを啜ったイリは、そう問いかける。

「ないわ」「ないね」

考えるそぶりを見せることもなく、一瞬で断る養父母に少女は苦笑する。

イリができる仕事はあるのだろうが、この二人に限らず、村の住民全員が滅多にやらせない。その事に憤りを感じるが、村人達の気持ちを考えると、仕方ない、という気分になる。

イリは他所から流れ着いた子供だが、この村で子供といえばイリしかいない。そんな状態では過保護になるのも無理もない。

だからこそ、小さな不満点は押し殺してイリは笑う。

「では、何をすれば？」

そんな問いを投げれば返ってくるのは決まっている。

養父母の呆れた顔だ。

想像通りの顔をした二人を見ると、心が通い合ってる気にさえなる。
いつも良い一日なのだけど、今日は殊更良い一日になりそう。
そんな予感が胸に渦巻いて、思わず頬が綻んだ。

第3話　交差

「これでラスト」

その一声と共に『魔』のフェイントに引っ掛からずに切り捨てた少年は、ふぅ、と一息吐いて刃を収めた。その際飛び散った紅が、夥しい量の死体達の血に混じって溶ける。

それを横目で眺めた少年は、周囲の警戒もそこそこに思考の海に沈む。

気になるのはただ一点。

この生命力溢れる木々に囲まれているにしては奴等…強すぎる。

『魔』といえど生物。

当然、人間で言う食事が必要になる。それに当たるのが大地からの魔力の吸収。例えば、この辺りみたいな木々に囲まれた場所では、良質で多量の魔力が蓄えられている。反対に、木々が少ない場所では、悪質で少量の魔力しか蓄えられていない。

だから、劣悪な環境にいる『魔』は少しでも多く魔力を得る為に争い殺す。奴等にはより良い環境を求めて移動する脳がないからだ。故に、それならば強くてもおかしくは無い。だが、ここは優良な土地だ。そこら中に魔力が溢れている。魔力を得る為に争う

必要が無い。
それなのに、フェイントやらコンビネーションやら……？
コンビネーション？奴等にそんな協調性など有ったか？
脳裏で打ち鳴らされる警鐘が一際強くなり、このまま放置してはダメだ、と訴えてくる。
確たる証拠も無い。むしろ偶然で片付けてもいい筈の事柄。
それなのに、何故こんなにも五月蠅いのか。
（早急に依頼を終えて報告しよう）
それだけを決めて、絡み付いてくる焦燥を振り払う様に目的の村まで駆け出した。

植物観察を開始して数分。
真っ白な少女はその顔を、わたし退屈しています、と言わんばかりに膨らませている。そんな少女に目に掛ける大人はおらず、それが余計に少女の退屈を加速させていた。
照りつける太陽は少し熱くて、体が火照って仕方ない。それに、養母からはあまり肌を焼くな、と言われている。理由を問うたところ曰く、嫁入り前の女の子だから、との事。理由になっていないと思っているのだが、それでも一応気にかけている。
そんな諸々の理由が重なり、外に出たのが間違いだったかなぁ、などと考え始めた少女は母親譲りの溜め息を吐く。
（良い一日になると思ったんですが…間違いでしたか）
そう思い、踵を返そうとしたとき硬質の音が耳を打った。
足を止めて耳を澄ましてみると、その音は断片的に、しかし継続して響いてくる。
場所はそう遠くはない。だが、行くべきかどうか一瞬だけ躊躇した。
人が傷ついているかもしれない。それだけで動く理由としては充分すぎるからだ。
飛び出したら過去の小さな疑問など忘れてしまう。だけど…この時すでに、多大なる幸福と絶対的な不幸を味わう事を予感していたのだろう。

イリは幼子にしては軽やかに地を駆けて、一歩一歩鮮明に聞こえるようになる音に幼子の様に顔を歪める。未だ姿は見えないが、なんとなくの見当は付く。
そして着いた先で、自分の見当が甘かった事を目の当たりにした。
そこで繰り広げられていたのは『人』と『魔』の間で起こる闘争。
孤軍奮闘している『人』と、無限に湧き出ていると錯覚させるほど膨大な『魔』の間で起こる、一方的な虐殺。
但し、優位なのは数で劣る『人』の方。圧倒的な速度と技術で、瞬く間に『魔』を細切れにしていく。
その虐殺が始まってから既に何分経ったのだろうか？
地面は元の色を失い、チカチカするほどの赤を映している。積み上げられた死体は数知れず。
その中心に立っている少年が、イリの方をチラリと見た。
その瞳は驚く程に黒くて、まるで底なし沼のようだと麻痺した思考の片隅で思った。
そう…麻痺してしまった。だから虐殺劇を傍観者として見守ってしまったし、少年に恐怖を覚える事もなかった。
「ん？……おい、お前」

機械的に『魔』の相手をする少年が、不意に声を掛けた。
始め、自分が対象だと思っていなかったので、案山子のように突っ立って悪夢のような光景に溺れていた。
「…聞こえてないのか?…おい、そこの白髪!!」
「白髪じゃないですよっ!!」
初めての非常に気に入らない呼称に、先程までの全てを忘れて言い返してしまう。そして…硬直する。
この少年は、屍の山を築き上げた張本人。即ち、生命を破壊した忌むべき『人』
ほら、こうしている間にも死体は増えていく。
一、二、三、
「やめてッッッ!!!」
四。
宙を舞ったナニカの首が、運命をせせら笑いながら少女の足元に落下した。みるみるうちに広がっていくシミが、一つ生命の終わりを示している証拠だと理解して絶叫する。ナニカ…ナニカその命を繋ぎ止める手段がある筈だと、自分の知識を総動員して探す。探す探す探す探す———?
無い。何も無い。何で?どうして?一つくらいある筈でしょう?それこそ、私の命を

捧げれば…

「おい。聞こえてるか?」

目の前に殺人者がいる。不機嫌そうな顔の破綻者が突っ立っている。

そうだ!この人なら、この人なら知っている。

「ねえ…どうやったらこの生命（いのち）は救えるの?」

私は私は血に染まった首を抱いて問う。彼ならば、彼ならば知ってると確信してるから。

「無理だ」

まるで、気味の悪いものを見たかのように青ざめた顔で少年は告げる。

無理?出来ない?不可能?

うそ…嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘

嘘嘘嘘

ソウダ…カラダ…カラダミツケナクチャ。カラダクッツケレバ……タスカル、スクエル、イキカエルッ!!!

ダカrアkラd――――ドコ?

「…お前ら、救いようがねえな」

知覚外からの一撃。

やわな少女の体は当然のように耐え切れず、狂った思考を闇に置き去りにした。

「あーあ。聖女ってのはこんな気味悪いモンなのかねぇ?」

少年の疑問に答える命など、死屍累々のこの場には存在しなかった。

第４話　本題

「…はっ!!」

ふかふかのベッドから起き上がる。辺りを見渡せば、もちろんイリの部屋。

その部屋の持ち主は、酷い目覚めだ、と苦笑する。

…悪夢なんて久しく見ていなかったせいか案外堪えたようで、噴き出た汗で全身がグショグショだ。鼻を動かせば、人様には嗅がせたくない匂いが刺激する。億劫な気持ちを誤魔化して、ベッドから抜け出して窓を開ける。

瞬間、心地良い風が全身を優しく通り抜ける。これならば少し無理して開けた甲斐があった、と一人頷く。

窓から顔を出してみると、住宅と森以外何も見えない事に気付く。まるで誰かを捕えているみたいだ、と突拍子ものない空想にくすくす笑う。

春風に頭が冷やされたのか、笑っている場合ではなかった事を思い出し、汗臭い部屋と自分を交互に見る。

とりあえず部屋はこのままにしておけば大丈夫だろう。問題は自分自身だ。

ぐっしょり濡れたワンピースを、おっかなびっくり鼻に近づける。

「んんッ!!」

思ったより臭う。

これは早急に何とかしないと『汗臭い女』の称号を入手してしまう!!

そう思ったや否や、開け放った窓から弾丸のように飛び出した。そしてそのまま器用に屋根を伝って地上まで降りる。後はただ記憶に基づく感覚に従ってだ走るだけ。

村の外へ真っ直ぐに、駆けて駆けて駆ける。風を切って進む感覚の気持ちよさに目的が上書きされそうになる。ときおり、視界が紅に染まるのも気にならない。それくらい熱心に、あるいは逃避するように走ってただ一箇所を目指す。村の敷居を超え、本能が発狂するのを静観しながら硬質の残響へ歩み続ける。

そして――――そして、足を止めた。

そこに広がるのは、見渡すかぎり死体に埋め尽くされた大地。その場所に、黒の少年は立っていた。

「よう」

この少年は誰だろうか?

気さくな態度に疑問を覚える…覚えるのだが、もっとナニカ別の事が気になる。それは決して見過ごしてはいけない出来事。この光景を造り出した源流。

一陣の風が脳を極寒に変えた

破棄された記憶が走馬灯の様に脳みそを埋め尽くす。心を破壊して破壊して破壊して――その果てに『魔』が死んでいく姿が一際強く焼きついた。

「あなたはッ!!」

律する事も出来ずに、ただ初めての激情に駆られて、ちっぽけな少女は叫んだ。

あまりの怒りに言いたい――否、突きつけたい言葉すら忘却して叫ぶ様はどれだけ滑稽だったのか。少年の顔に冷笑が浮かぶ。

それがまた少女の内を燃やす。

「あなたは何故彼らを殺すのですッッ!?私達と同じ…生き物なんですよッ!!」

「殺されるからだ」

一言。少年の放ったその一言だけで、幼い炎は消えかける。

それでも、ぐらぐら揺らいだちっぽけな自尊心を守る為に呟いた。

「…それでも、それでも殺すことないじゃないですか」

「俺に『死ね』と?」

少年が言った通りだとは分かってはいた。殺されそうな時に抵抗しなければ殺される事、殺しに来た相手を殺さなければ、いつまで経っても死から逃れられない事。

だから、少年のしたことは生き残るため。それを責める事など、イリには出来ない。
「答えられなくても別にいい。それより…精神の修復が随分早いじゃないか」
「……何を、言っているのです?」
当然の様にこぼれた言葉に少年は敏感に反応した。口元を歪め、憐れな物を見るような目で見た。
「…気にするな。独り言だ」
そう告げた少年が気になったが、訊いても答えてくれそうにない。
少年との関係上、談笑するわけでもない。だけど、なんとなくこの場から帰りにくい。
結果として、ジッと少年を見つめながら待機する事になる。
幾許の時が過ぎた。
お互い何をするわけでもなく、ジッと佇んでいるだけ。ここは休憩所ではない。運命次第じゃ今にも『魔』が襲い掛かってくる場。椅子のひとつもありゃしない。あるのは尽きぬ死の数々。
ここに居たって良いことはない。むしろ悪いものでも呼び寄せそうなものである。
そう思った矢先、ポツリと少年は呟いた。
「来たか」
聞き返そうと口を開きかけた時、気付いた。

「え？」

『魔』が存在していた。死んでいたはずの『魔』が。

死体の山からずぶずぶと湧き出てくる。

一目で理解した。

アレは駄目だ。アレに人間的反応など求めてはいけない。アレにあるのは本能による殺戮のみ。

ここにいたらアレの餌になるだけ。

逃げなくてはいけない。逃げなくてはいけない。逃げなくてはいけない。

なのに――なんで足が動かないのか？

「チッ!!箱入り娘かよッッ!!」

いつの間にか懐に忍び寄っていた『魔』を、銀色の刃が貫く。一瞬で絶命した『魔』は私に生きた証だと言わんばかりに血を擦り付ける。

それらを全てコマ送りで見ていた。自分の事なのに、自分が体験している事なのに、どこか夢の様。その耽美な感覚を振り払うために一度目を閉じる。

世界は闇に包まれ、どこからか響く金属音以外何も無い。このまま閉じていれば終わるのかもしれない。心に宿ったその思いは、ただ通過していっただけ。心中に変わりはない。ただ、少しだけ目を開けるのが怖くなった。

それでも、私の中の冷静な部分が告げる。このまま目を閉じていても怖いだけだよ、と。

だから、迷いを振り払って目を開ける。

絶句した。

まず映ったのは視界を埋め尽くすほどの『魔』

次に映ったのはその侵攻をたった一人で、しかも私というお荷物を抱えながら防いでいる少年。その一手一手がふとした拍子に崩れてしまいそうな綱渡り。

あるときは、片足で引っ掛けた『魔』を別の『魔』にぶつけながら二本の刃で左右を薙ぐ。あるときは、『魔』が放つ魔法を受け流して別の『魔』に当てながら回し蹴りを放つ。

おかげで、ずっと棒立ちだった私は傷一つ負っていない。

彼は奮闘している。私を死神から守るために、死神に刃を振るっている。

だけど、私は何も選べない。

彼と共に『魔』を殺す事も、『魔』と共に彼を殺す事も。

彼には否定された。殺しに来る相手を生かす事を。だけど、一度否定されたからと言って折れるほど、私の信念はヤワではなかった。

どんな種族だろうが、どんな経歴を持っていようが、どんな思想を持っていようが、そ

れら全てを私は救う。それだけは変わらない。
…だけど、何も出来ない。私にはこの殺戮を収めるほどの、言葉も技術も何も無い。
ならば、諦めるか？いいや、それだけは出来ない。
だから…一つ賭けをしよう。私の書いた台本通りに動けば花丸。それ以外はペケ。
チップは私の信念。そんな単純な賭け。

前足に体重をかける。

このまま飛び出せば、彼の努力に泥を塗ることになる。
お前の良心はそれを許すのか？

後足はしっかりと地面を踏む。

愚問だろう。
許すも何も、やるしか考えられない身なのだから。

弦から放たれた矢の様に、素早く一直線に『魔』の元へ駆ける。

「嘘だろ!!?」
彼の驚愕も捨て置いて無心で駆ける。
直ぐ目前に迫った『魔』にけたましい警鐘が、頭を反響するのを他人事の様に聞く。
『魔』の硬くて鋭い爪が振り下ろされる。
私は右腕でその軌道を反対からなぞる。
「馬鹿野郎ッ!!!」
お腹の辺りへの圧迫感と浮遊感に包まれる。
緩慢な動作で顔を動かすと、彼の怒ったような恐れるような顔が映った。その変な表情以外のスペース全部に『魔』が蠢いている。
あまりの多さに視線を逸らすと、たった今傷つけたばかりの腕が目に入る。
はっきり言うと、腕の状態は悲惨だ。切れ込みが腕の長さの半分くらいまで入っていて、その部分から湧き水のように血が絶え間なく噴き出している。彼が割り込んで脱出しなかれば切断されていただろう。それなのに、痛みは全く感じない。
ボーっとしていると、今にも取れてしまいそうなくらい、ぷらんぷらんと揺れているのが気になるので、左手で押さえつける。
「今はなにも問わん。腕は押さえとけ」
簡潔にそう述べた少年は、軽やかな動作で少女とともに木々に紛れた。

第５話　落ちる意識

血の夢を漂っていることを知覚したのはいつだったか。
３順目？４順目？はたまた、忘却している事もあったかもしれない。なんせ、ここは永久だから。
故に、過去を思い出そうとするのよりは、未来を描く方が建設的だろう。
この夢は、毎回違う景色に違う時代。けれど、毎回同じ立場。
私が出来ることは見ることだけで、干渉など出来ない。そんな、もどかしい責め苦の様な夢。
こうしている今も再生を続ける仕事熱心な夢に辟易する。
「なあ、もういいだろ？もう君に出来ることはない。だから――
「退け、というの？」
「ああ」
「…言い方が悪かったわ。見捨てろ、というの？」
「…そうだとも」
一方は優しそうな少年。もう一方は気の強そうな少女。

少年は少女を守ろうとし、少女はそんな少年を糾弾する。
けれど、お互い分かっていたらしい。
結局は少年が折れるという事を。望んで戦場に向かう少女に、君らしい、と仕方なさそうに微笑んだ。
場面は変わる。

「どれくらい…その、救えたんだ？」
「３２人のうちの１人だけ。あなたの言う事は…正しかったわ」
「そうでもないさ。君がいなきゃその１人も犠牲になっていた」
「…そうかしら」
「そうだとも」
「でも、３１人も亡くなってしまったのよ」
「……なら、君が助けた１人も見捨ててよかったのか？」
「そうじゃないわッッ!!」
「ああ、そうだとも。そうじゃないんだ」
「え？」
「さっきも言ったが、君がいなきゃ犠牲者は１人増えてたんだ。なら、君に出来る事は

あったんだ。それを今は心に刻んでくれ」
「…そういうことじゃないの分かってるでしょ?でも、ありがとう」
そう言って、少女は静かに泣いた。それは嬉しさの涙でもあったのだろうけど、悲しさの涙の割合の方が高かったのだろう。
少年は少女を理解できていなかったのだから。
場面は変わる。

「…結局、あなたでも私を理解出来なかったのね」
「……」
「考えてみれば当然。私(私達)の思考なんて分からないわ」
「……」
「それでもあなたは必死に私(私達)に着いて来てくれたわ」
「……」
「ありがとう。さよなら。あなたも幸せに生きて」
黙ったままの少年に、言いたい事だけ言って少女は去った。
場面は変わる。

少女はどんなに小さな争いでも飛び込んだ。
少女はどんなに大きな争いでも飛び込んだ。
救うため救うため救うため、と自身を省みずに他者だけを気にした。
Aを救い、Bを救い、Cを救い――――果てに恨まれた。
場面は変わる。

「君は馬鹿だよ」
「…久しぶりだけど、それは認められないわ」
「もう争いは止められないぞ。…喧嘩しているAとB。そのどちらにも協力したら恨まれるし、根本的な解決になってないから、また喧嘩し始める。…分かってたはずだろ?」
「…そうね。」
「分かっていても……見捨てられない、か」
「あら…少しは私達の事、理解できるようになったの?」
「そうだとも。君とは違って馬鹿ではないからね」
「ええそうね。…馬鹿ではないのなら、教えてくれないかしら?」
「君と共に逃げるためさ」
「…ほんっと頭良いんだから」

「それだけで済まさないでくれ。無駄と分かっても聞きたいんだ」
「無理よ無理」
「分かってる」
少年は仕方なさそうに微笑んで、踵を返して少女の前から消える。
その背中をずっとずっと、少年の姿が見えなくなってもずっと。少女は見つめ続けていた。
その日から、少年は一日に一回少女を訪ねた。
いつ着弾するか分からない、恨みという矢を見て見ぬフリをして他愛も無いことを話した。
ある日はお互いの趣味嗜好を話し、ある日は別れてからあった出来事を話した。
少女と再開して一週間。不思議なほど穏やかに過ぎた。いつ、国家同士の争いが勃発するか分かったものじゃないのに。それだけでも奇跡と呼べるくらいなのに、もう一日、もう一週間、と平和な時を刻むたびに少年の心は軋む。
少女と再会して一週間と三日。
場面は変わった。
「なあ…なんで僕が生きているんだ？」

……

「おかしいだろ？僕は何もしなかった」

……

「…君は世界を平和（救う）ために尽力した。僕は君を救いたかっただけで、行動などしなかった」

……

「なあ、今どうなってると思う？」

……

「君が救った国は例外無く荒れた。君に救われた人達は君を見捨てた国に楯突いた挙句、殺された」

……

「君の成果は彼らを延命させただけ。君のせいで、殺された人の家族は国を恨み、それが連鎖して国は二分されるだろう」

……

「君の生き様は正しくて美しかった。だけど、それは『人間』とは呼べない生き方だった」

……

「人間は完璧を求める。だけど、真に完璧なものは受け入れられない。そんな狭量な生

き物なんだ」

……

「もうじき戦争が始まるだろう。火種であった君が死んだのにね」

……

「伝えたいのはそれだけさ。後はゆっくり死んでいてくれ」

場面は変わり、血の夢は閉幕を迎える。

フィナーレはみんな大好き死屍累々。人は死に、村は荒れて、国は更地となり、残されたものは去ったものに寂寥と羨望を抱く。

何順目かの夢が終わったとき、私は夢を見る意味を理解し始めた。

夢は皆、正しくて愚かな少女の人生を描いていた。馬鹿みたいに人を救いたくて、全力で走った後、振り返れば救った人より多い死者を生み出していた。

この夢は、こうなってはお終いだという教訓。

だけど、私にはいらない教訓。

彼女達は間違っていて、私は間違っていないのだから。

『人』だけを救おうとするだなんて愚かな考え。そんな中途半端な救いを与えたから皆に恨まれた。

『生ける者全て』を救う。これこそが私が辿り着く、私の行為を皆が容認するステージ。

私の意志が定まるのを待っていたのか、血の夢は徐々に輪郭を失っていく。それと平行するように、外界の情報が私の鼓膜を刺激し始める。

―おい、コイツくたばってねえよな？―

―はい。脈はあります―

聞き慣れない声と、聞き慣れた声。そのどちらもが、等しく薄れゆく夢を震わせる。

夢は終わり、記憶はやがて薄れるのだろう。けれども、私はこの夢に縛られる。

それだけは心に刻まれた。

第６話　腐れ縁の邂逅

始めに感じたのは苦痛。
夢が溶けた瞬間を狙ったかのような激痛に白の少女は、声だけは出さないようにと無我夢中で歯を噛み締める。
「イリ。返事は出来る？」
次に感じたのは混乱。
自分が何故こんな激痛を味わっているのか、何故こんなにも養母が優しい声色なのか。様々な疑問が、痛みの隙間をぬって脳を駆け巡る。
だが、疑問は捨て置いて、返事…返事をしなくてはいけない。
それだけを意識して、痛みで鈍化した思考に、一秒遅れの指令を飛ばす。
だが、叫びださないようにするだけで精一杯な脆弱な理性が、それ以外のオーダーなど受け入れられるはずも無く、イリの口は音を奏でなかった。
不本意ながらイリが黙り込んでいると、察したのか養母は話し始めた。
「…出来ないならそのまま聞いて。あなたの怪我の具合についてよ」
怪我…

その二文字だけで、現在の状況がなるべくしてなった事を思い出す。
『魔』の一撃を腕にもらったのだから、腕が付いているだけでも幸運と言えるだろう。
確か、少し前に読んだ各種族の特徴が書かれた本にはこう書いてあった。
『魔』は現在大まかに二種類に分けられる。
一つは我々にとって馴染み深い『モンスター』。彼らは総じて理性を持たず、本能の赴くままに殺戮を重ねている。その大きさや形状は多種多様で、小さいものは小石サイズ。大きいものは大陸一つ分もある。
もう一つは知らない人が多いであろう『魔人』。彼らは我々人間と同じ姿、同じ言語を操り人間社会に溶け込んでいるが、理性を獲得した為か危険性はさほど無い。彼らがこのようになったのは、過去の大戦で人間の優位性を理解したが故の事だろうという意見が多数である。
この二種は大きく異なっている部分が多いが、共通するものもある。その最たるものが体の強靭さである。その腕の一振りで岩壁は削れ、その一歩で地面を陥没させる。彼らが本気を出せば、これくらいは容易な事である。
この本の通りなら、この程度の怪我で済んだのは幸運だったと言えるだろう。ヘタをすれば片腕が無くなっていたかもしれないのだから。心の中だけで溜め息を吐いたイリは、だけど、と浮かない顔をする。

この痛みが続くかぎり、幸運に感謝する気には到底なれない。溜め息一つ吐く事もままならないのだから。そんな自業自得を呪いつつ、養母の声に耳を澄ませる。

「…心配しなくて良いわ。お父さんが治癒術士を呼んでくれるから」

前言撤回。私は多大なる幸福を受け取っています。

治癒術士が何かは知らないが、おそらく小耳に挟んだ事しかない【魔法】というのを操るのだろう。一度【魔法】というものを見てみたかった。これは怪我の功名、というものだろうか、とイリは内心ほくそ笑む。

それならばこの痛みにも感謝を、と現金なものである。

「それで、こっちが本題なんだけど」

その言葉で、ニヤニヤ笑いは固まる。

残ったのは【失敗した】の言葉だけ。この後に予想される養母の言葉に最大級の恐怖に、顔を一層歪ませる。

「何で…あんな場所であんな事をしたの？」

やっぱり。

先程までの恐怖が綺麗さっぱり消え失せた代わりに、少女に残ったのは静かな納得。

「あんな場所に行ったのは偶然です。ですが、あんな事をしたのは自らの意思です」

ピカピカに磨かれた鏡のように一切の曇りなく、己の狂気を応えたイリに養母は顔を

強張らせた。

「…そう」

それだけを告げて、イリの部屋を無人にした。

そして、ただ一人残されたイリは憂鬱そうに、中途半端に開いている窓から外を眺める。

燃えるように赤い空がこれからを暗示しているようで、すぐに目を背けた。

同時刻。

女性は、少女の部屋のドアにもたれかかって嘆いていた。
「どうして。どうしてあの子はあんなにも…」
押し殺した声でそう呟いた。
声に出すべきではない事だが、少しでも声に出さないと叫びだしてしまう、という確信が彼女にはあった。
故に、イリに聞こえぬように静かに囁く。
「聖女…なんて、馬鹿らしい。あの子はあの子のままでいいのに」
心は、一度だけでやめようと思っていたのに体は、無視して声を発し続ける。
自分はこんなにも自制心の無い人間だっただろうか、と口元を歪めながらも独白を続けてしまう。
「彼が来てしまった。厄病神が…ッ!!?」
止まらぬはずの独白はいとも容易く止まった。
不意に現れた少年に驚いたからだ。
そう…イリと同じくらいの背丈の少年から発せられる、噎せ返る様な死の気配に。
「アレは目を覚ましたか?」
一切の光を通さないような黒い瞳が女性を射抜く。
この不気味な目が彼女は嫌いだった。

これも仕事、と割り切り、アレ、とはイリの事だろうかと思うと、酷くイラついた。
そして、ふと気付く。いつの間にか情が移っていたことに。
最初は――――
「おい、どうなんだ？」
その声に我に返る。
そして、苦笑まじりに答える。
「はい。目を覚ましましたよ」
「じゃあ入るぞ」
そう言うと、少年は返事も聞かずにドアを開ける。
突然の事に呆気にとられた白の少女を視界に捉え、黒の少年は背後に向けて声を発する。
「疫病神が、お前等のからくり人形を攫いに来たぞ」
その言葉を知るのはずっと後。故に、この日に知った事はただ一つ。
黒の少年は、白の少女の人生に交わった。

第７話　出会い

その出会いは唐突に訪れた。

年を重ねた木々に囲まれた家の中、白の少女は慣れぬ苦痛に顔をしかめ、黒の少年は濁った瞳で少女を見た。ただそれだけの、つまらない出会い。

そこに感情はなく、ただ運命によって出会わされただけ。それでも、この出会いは彼と彼女にとっては宝物と呼べるものになった。

「疫病神が、お前等のからくり人形を攫いに来たぞ」
イリに背を向け、そう物騒な事を嘯いた少年に少女は既視感を覚える。
見慣れぬ、だがつい最近見た覚えのある少年。あーだこーだ、と頭を悩ませている内に振り向いた少年を視界におさめて得心がいく。と同時に、この少年なら物騒な事を言いそうだ、と頷く。
そうしている間に、イリの目の前まで近づいてきていた少年は、ベッドの隣にあった綺麗な木目の丸椅子に腰掛け、その黒色の瞳にイリを映した。
吸い込まれそうなくらいにジッと見つめられたイリは、思わずチラチラと目線を逸らした。そのおかげで、今までは目がいっていなかった、全体的に黒っぽい服装、額に巻いた赤い布などが目に入った。
「…久しぶりだな、自傷娘」
暫く見つめていた少年が発した第一声がコレ。アホだと言われる事が多々あるイリからしても酷い言葉だと思う。
だが、そう言った本人は至って普通。むしろ無表情で若干怖いくらいである。
どう応えるのが良いのかな〜、などと頭の片隅で考えつつ思ったままに言葉を紡ぐ。
「…自傷娘とか酷くないですか?」
いつもならハイテンションでツッコムのだが、いかんせん腕が痛い。流石のイリで

も、叫べば傷に響くことくらいは理解している。よって冷静に、尚且つ賢く反撃したいものである。
「そのとおりだろ？」
「そのとおりです」
反撃の手など始めからなかった。事実を虚偽へと変えることなどできないのである。
と、また一歩賢くなったイリは脳を空っぽにして伝えたいことを続ける。
「ありがとうございました」
「…唐突になんだ？」
イリのお礼に露骨に顔をしかめた少年は、あくまで感謝される事などしておりませんよ、と言わんばかりに顔と同様に疑問符を浮かべた。
その態度にイラッときたイリは、痛くないほうの腕をブンブンと振って、私怒ってますアピールを無言でした。
「……生理か？」
「来てないですからッ、て痛あぁぁぁぁぁぁ!!!」
痛みを逃がす為に体を捩っているイリを見て、少年はフッ、と笑った。
「あなたのせいですからねッ!!?」
つい、ツッコミをいれてしまった少女はまた痛みへの門を開いて悶え始めた。それを

止められる唯一の人は失意に耐えかねて外出してしまっていた。故に、少女の絶叫を妨げる人はいない。

そんなカオスな状態から数分。

ようやく自身の体と闘え終えた少女は、はぁ、と溜め息を吐いて尤も気になることを問うた。

「なんで生理だと思ったんですか？」

「女が機嫌悪い時は、だいたい生理だと聞いていたからな…」

目を逸らした少年の雑な知識に、これみよがしとばかりに大きく溜め息を吐く。

これ以上突いたら、また話が拗れるだけだと悟ったイリは、強引に話を戻す。

「…あなたは感謝される理由が無いと思っているみたいですけど、私にはあるんですよ」

顔を向きなおした少年は続きを無言で促す。

「『魔』から私を救ってくださったこと、『魔』を救おうと自分の体を犠牲にした私を救ってくださったこと」

自身が行った異常性に気付くことなく淡々と述べていく少女を見て、少年は心の中で呟く。

なんで…こんな厄モノ引き受けちまったんだか。

「その二つに関して感謝を。ありがとうございました」

内心に気付いたわけではないだろうが、少女は光り輝く湖面の様な、虚偽を暴く銀色の瞳で少年を射抜く。

その真っ直ぐな瞳が、夢に溺れていた頃の自分を想起させて苛立った。

「…どうも」

だからだろうか、純粋な気持ちに無粋な態度で応じてしまった。

それでも、白の少女は全てを包み込む笑みを浮かべた。

一瞬、たった一瞬だが【救われた】と思ってしまった。その事に得体も知れぬ恐怖を抱く。

何が【救われた】だ。俺は懺悔などしていないし、少女は何も言っていない。そこに【救い】が介入する余地があるか？

初めて見た時は半信半疑だったが…今なら確信を持って言える。我が身を犠牲にしてまでも【救い】を与える精神性、微笑み一つで【救い】を与えるカリスマ。

これが、聖女

保護…という名で手元に置きたい気持ちも分かる。コイツが無差別に【救い】を撒くだけで人々はコイツを崇拝するだろう。信仰に目が眩んだ信徒どもほど面倒な人種はいない。それが膨れ上がれば最悪、聖女がトップの国を造るためだけに、国家の転覆すら行う可能性が出てくるからだ。

だから、慎重に扱わなければいけない。脂汗の浮かぶ手を握り締めて、ピンッと気を張り詰める。

「…突然で悪いが話がある」

出だしは考えても仕方ない。だが、内容はそうもいかない。

如何に相手にとってメリットとなる事柄だけを話すか、如何に１００％の嘘を吐かないで言葉を飾るか。この二つこそが重要だと少年は思っている。

その信条に従って、戦闘時の様に高速で頭を回転させる。

「はい？」

少女の不可解そうな返事すら耳に留めずに、これまでの出来事を統合して虚構の道筋を求める。

相手は幼い――魔を救う――だが人を敵視しない――おそらく人も救う――だが力は無い

「お前は何を救いたいんだ？」

脳で電気が弾けると同時に口に出していた。

予想が確かならば、この方法なら連れ出せるという確信があったからだ。

真面目な話だと察知したらしい少女は、キュッと唇を引き締めて真っ直ぐ少年を見る。

その視線から一刻も早く逃れたい衝動はあるが、真剣な話をしているときに目を逸らすとどうなるかなど、余程の馬鹿でもない限りは分かっている。
早く終わんねえかなぁ、などと脳裏でぼやきつつ少女の目を見返す。
「生ける者全てです」
思わず一笑に付したくなるほど馬鹿げた答えが、滑稽なくらい真面目に少女の口から出てきた。
予想はしていたことだが、ここまで極まっているとは思いたくなかった。だが、これで少女は必ず着いてくる。
「なるほど…で、どうしたら救えると思う?」
「それは……考え中…です」
馬鹿だコイツ。
少女の返答を聞いた瞬間、少年が何度か思ってはいるが別の意味だった【馬鹿】がもう一つの意味を帯びた。有体に言えば、理想論者を笑う意味だったものが、アホ・考えなし・ポンコツｅｔｃ．などという意味に変化したのだ。
見る見るうちに赤くなっていく少女を、可哀想なものを見るような目付きで見た少年は、気を取り直して望む方向に舵取りする。
「なら、参考程度に聞いてくれ。俺が思うに生き物を救うためには強くなくてはいけな

い」
「強く？」
「ああ。強くなければ…お前の様に見ているだけしかできない」
一瞬、ほんの一瞬だけだが少女の顔が歪んだのを捉えられてしまった。
自分で意図してやったことだが、思わず慰めたくなる。そんな感情を殺して言葉を続ける。
「だが、強ければそうはならない。力と力がぶつかり合っている場に入り込み、尚且つ生き延びられる」
「言葉では…止まらないのでしょうか」
半ば自分の答えを確かめる為の呟きを発した少女に、間髪いれずに答える。
「ああ。そもそも言葉を解す生き物自体が少ないだろう。もし言葉を解したとしても、闘争の最中は昂ぶっている。そんな中、闘う術も持たずに飛び出していけば、新たな闘争相手だと認識されて殺される可能性の方が高い」
「…そう、ですよね」
折れた。
その予感が、確信が、痺れるような感覚を訴えてくる。後は一言切り出せば良い。
「ココからが本題だ。お前は、闘う術が欲しいか？」

「……はい」

ほら、純粋な少女はこんな簡単に折れた。本当は争う力など欲しくないだろうに。それでも人を救うためなら、と涙ぐましい努力をする。

少年が語った事などただの予想にすぎないというのに。

「なら、しばらくこの村にいるから、怪我が治り次第伝えに来い」

「分かりました」

硬い返事を聞き届けて、用は済んだとばかりに少年は背を向ける。

これが何度目かの出会い。
けれども、どんな出会いより色褪せない出会い。
この話がなかったら、少女は旅立たなかった。
この話をしなかったら、少年は諦めたままだった。
だからこそ、この出会いは祝福だ。

たとえ　――――残虐で優しい聖女と呼ばれるようになってしまっても

第８話　効率の良いお悩み処理法

ドアの閉まる音が鼓膜を打つ。その余韻に浸っている内に気付いた。
あの少年がいない。何故だろう、と疑問に思い――――また気付いた。
少年は部屋を出て行った。
その事実に至るまで…いや、気付くまでかかった時間の長さにイリは思わず苦笑する。どれほど自分は動揺しているのだ、と。
少年が残した言葉――生き物を救うためには強くなくてはいけない――
それが間違いだとは言えない。だが、少女の心に立ち込めた暗雲は晴れない。
少女は無事な左手でそっとボロボロな右腕を触る。
この怪我が出来たのは私が無力だったから。それはどうでもいいのだけれど、もし…私以外の生き物に出来たとしたら……考えるだけで狂いそうになる。
思わず想像してしまった少女は蒼白な顔で嘔吐く。
力はやっぱり必要なのかもしれない。けれども、他者を傷つける技術など身に付けたくも無い。
力を持つことを肯定するのは、他者を傷つけることを肯定するのと同義な気がする。

けれども、力を持つことを否定するのは、他者が傷つくのを容認しているような気がする。

そんな堂々巡りの思考に共鳴するかのように等間隔で痛みを伝えてくる腕が、思考をやめさせてくれない。だから嫌でも考える。

考えて考えて考えて考えた。それでも答えはでない。

「…イリ」

その声に半ば無意識的に顔を上げた少女は、心配そうな顔をした養母を目に入れた。

その顔を目に入れた瞬間、今まで悩んでいたのが嘘かの様な綺麗な笑みを少女は見せた。

「何ですか?」

その、日常に埋没した声色のなんと完璧な事か。息をするように苦悩さえも封じ込めて、他人に気付かれることもなく紛れる。誰もがその内心を疑うことなどないだろう。

それは養母も例外ではない。

心配そうな顔を崩さないものの、少女の内心を訝しがる様子はない。

誤魔化せたかな?

仮面の様に笑みを貼り付けたままイリは小さく息を吐く。

この苦悩は悟られるべきではない。何故なら少女は救う側なのだから、これ以上心配

をかける訳にはいかない。
そして、これから始まる日常の会話を思い描き……裏切られた。
「何か悩んでいない？」
笑みにひびが入った。
大丈夫落ち着いて落ち着いて落ち着いて。ずっと私は俯いて硬い顔で考え事をしていた。何か悩んでいると思うのが普通。だから落ち着いて否定すれば良い。理由などはいくらでも浮かべられる。
酷いパニックに晒された少女の内面は嵐の様に荒れ狂っていたが、それも一瞬だけ。すぐにリカバリーして否定の言葉を紡いだ。
…外面のリカバリーを忘れて。
平時と変わらぬ声で紡がれた音は日常を約束するものではなく、余計に心と顔の乖離を感じさせるだけだった。
当然養母もそれに気付いて否定する。それをイリは否定する。
否定し否定し否定し否定し否定し否定し――――結局はイリが折れた。
「悩んでいます」
その表情が映すのは、多大なる罪悪感とそれを隠れ蓑にして少し顔を覗かせる嬉しさ。何故罪悪感を抱くのかをできない寂しさを感じつつも、女性は先を促す。

「…ある人に、人を救うには他者を上回る力が必要だと言われました。その考えは今まで私の中に存在して…いえ、疎んで遠ざけていました。でも…その考えを聞いた瞬間、間違っていない、と思ったんです」

そこまで話し終えた少女は、一際強い悪感情を影に落とした。それは、罪悪感だったり失望だったり恐怖だったりした。

そんな、少女自身も制御できていないであろうチグハグな感情は加速していく。

「暴力は間違ってる。間違ってるのに、間違ってないって思った!!私は救わなければいけない。数多の命を…全部。その道に暴力なんていらないのにッ!!なんで…なんでなんでなんで、否定できないんですか…?」

ただ思うままに紡いだ言葉はさながら慟哭の様であった。それは女性の心を抉り、一人の人間の人生、という錘を自覚させるには充分すぎるほどだった。

そんな荒れ狂う感情を御するのは並大抵なことではなかっただろう。だが、未だ籠の中にいる少女はそれを成し遂げた。少女は我慢強かった。女性が悩みを訊かなかったら、そのままこの感情を抱え続けただろう。

だが…果たして我慢強かった、で片付けていいものだろうか?

確かに、彼女は聡明でヘタな大人より落ち着いている。それでも彼女は、未だ華奢で未熟な少女なのだ。そんな幼い子が、荒れ狂う感情を他人に悟られずに封じ込められる

ものだろうか？

…そんな事、大人にだって簡単には出来ないだろう。

ソレが出来る…出来てしまうのは、聖女（バケモノ）だからなのか。

一瞬薄ら寒いものを覚えた女性は、様々な感情がひしめき合って青褪めた顔をした少女（娘）を見て、そんな事を覚えた自分を激しく後悔した。

イリは紛れも無い聖女（バケモノ）だ。けれども、決して分かり合えない訳ではない。

ご飯を食べれば頬が綻び、頭を撫でれば照れ臭そうにし、怒れば落ち込み、からかえばむくれる。そんな面だってある。

だからこそ、いつの間にか『偽者の母親』だとしても『愛娘』に何かしてあげたくなったのだから。

そう思った瞬間、重圧に押し潰されそうな心を飛び出して、声が出た。

「イリ、あなたはどうやったら人を救えると思うの？」

「…考え中です」

罰の悪そうな顔でイリは呟いた。

その様子に女性は苦笑しつつ、言葉を続ける。

「ならあなたの考える、救い、って何なの？」

「誰も傷つかないことです」

今度は淀みなく答えた少女に、女性は聖女のあり方を見た気がしたが、今は関係ない。一つだけ、少女より長く生きている女性から送りたい言葉があるのだ。それはとても単純な事で、だからこそ忘れやすくて気付かない。『誰か』が教えてくれれば直ぐに気付くもの。

「イリ。ここまで訊いといて無責任かもしれないけど、あなたの考えてることに答えなんて無いわ。答えがあるのならあなたは悩まないわ」

女性の言葉を聞いても、予見していた聡い少女は狼狽しなかった。その代わり、悲しそうに口元を緩めた。そのまま機械的なお礼の言葉を吐き出そうとした少女を遮る形で、少女にとって初の『誰か』になるべくして口を開いた。

「答えを見つけてから進むんじゃない…答えを見つけるために進むの。お腹空いたでしょう?ご飯持って来るね」

唯一自分が信じている事柄を少女が受け入れてくれますように…

少女の顔を見ずに、それだけを願って背を向けた。

答えを見つけるために進む。

少女はその考えをじっくりと噛み締める。

単純に考えれば、答えを見つけることを先送りにする逃げの言葉。

だが、そこまで短絡的な言葉には聞こえなかった。そう思うのは、胸に響いたものがあったからなのだろうか？分からない。

目尻が下がり、唇が自然に弧を描く。この【苦笑】という表情が起こる原理も分からない。そう…私には分からないものだらけだ。

きっと、大人になればもっといろんな事が分かるんだろう。私と比べて生きた時間が長いし、考えた時間も長いから。

大人は私よりずっと先を進んでいる。その道程で様々な寄り道をして、様々な答えを得たんだろう。

たった今気付いた。

きっと…またあやふやな表現だけど、おばさまが言いたかったのは、今分からない事でも時が経てば分かる事がある…そんな意味かもしれない。

その私に都合の良い甘っちょろい考えは、あやふやだらけの私に優しく染み込んで、ちょっと休憩しよっか?と頭を撫でる。あやふやな悩みは明日考えればいい。

今はただ眠いのだから。

うん。おばさまには悪いけど、今日くらいはおやすみなさい。完璧な私は明日から活動再会です。

第９話　場を掻き乱す術士

―今分からない事でも時が経てば分かる事がある―

そんな、自分にとって都合の良い考えを得てから二日。少女は未だ、力の是非を気にしていた。

「力…私の体を支えてるのは力…けれど人を傷つけるのも力。その違いは…何だと思います？」

「知るか」

この二日ですっかり見慣れた少年に、問いの答えを求めてみても一蹴される。代わりに返ってたのは呆れ混じりの問い。

「んで…お前、闘う術が欲しいと言わなかったか？」

会話のキャッチボールが下手だなぁ、と少女は思いつつも空気を読んで得意な笑顔で黙殺。

「言いましたね。でも…それとこれとでは話が別でしょう？」

「かもな」

それっきり会話が途切れた。

だが、イリがこの2日で慣れたのは少年が訪れる事だけでない。この無言の時間も同じだ。

お互いの問いが不完全燃焼で終わったのは残念だが、かと言ってもう一度問い返し・返されしても平行線を辿りそうである。

結局今日も答えはでないかな、と欠伸を噛み殺した少女の目の前で、静かにドアが開いた。

「こんにちは～ラヴァエちゃんが来たよ。患者さんはあなた?」

快活な声を響かせて現れたのはその声質とは正反対で陰気な雰囲気を纏った少女。

まず目に入ったのがぶかぶかのとんがり帽子。薄汚れたその帽子は、象徴たるとんがり部分がよれよれになっていてなんとも物悲しい。それを被っている本人は、全体的に首の下辺りまで栗色の髪の毛を伸ばしているが、手入れが雑なのか枝毛だらけである。極めつけに、全身をすっぽり薄汚れたローブで覆っている。

浮浪者みたいな人物に、患者はあなたでは、と思うのは仕方ないだろう。

「よう…ド腐れビッチヒーラー」

状況が読み取れず、静観しているうちに少年が暴言（イリには理解できないが）を吐いて喧嘩を売り始めた。

理解できないなりに悪い気配を感じ取ったのか、少年を睨みつけるイリ。

そんなイリの予感を裏切らず、少女は余裕の笑みで少年を煽り始めた。
「あれぇ～どうしたんですか、純情ワルぶり少年」
傍目で見ているイリにも分かる生き生きとした笑み。これで喋っている内容が暴言でなければ、陰気な少女の滅多に見せない笑顔、と片付けられたのだが、相変わらず世界はイリに優しくなかった。
「どうせアレで懲りずに誰彼構わず股開いてるんだろ？いやはやビッチに加えて被虐願望までか…このガキ治すよりお前の頭と、同じくらい緩い股でも治したらどうだ？」
「何？まだロマンチックな思考回路してるの。これだから肉欲に溺れたことの無い純情少年は…君の事は心底嫌いだけどさぁ、一度ボクが抱いてあげようか？そうすれば、その下らない脳みそも救われるかもよ？」
「救い!?」
訂正、世界はイリに優しいかもしれない。
『救い』その言葉を確かにこの少女は言った。さらに、患者さんを探しているようだった。よって彼女は医者。医者ならば、何らかの『救い』の手段を持っているかもしれない。
こうなったら止まらないのがイリ。遠巻きに観察していたのが嘘の様に、声を上げて存在をアピールし始めた。

「どのような手段で救うのですか!?教えて下さい!!」

だが、少年少女が反応する事はなかった。

そう…ある一点。閉め忘れていたドアの隙間。そこから漏れ出す尋常じゃない殺意。それは戦闘態勢に移行するには充分な量。

先程まで醜い争いに興じられていたとは思えない程に場は染まった。ココはもう戦場だ。

少年は、未だ喧しい声を上げるイリをどうやって守るのかを考えつつ、殺意の先を見据える。

少女は、一番生き残る確率が高いであろう手段を模索しつつ、殺意の出方を読む。

張り詰めた空気を崩しにかかるが如く、焦らすようにゆっくりとドアが開く。キャンキャンと吼えて、最大限に高まる緊張を台無しにする白の少女を潰そうか、と両者の意識が刹那緩んだ時に、ソレは現れた。

ソレは一見すると普通の成人男性だった。平凡な顔立ち、平凡な体型、平凡な雰囲気。だが、その獲物を射抜くような目だけは平凡から逸脱しすぎている。手には何も持っていないが、それがかえって不気味だった。

ソレは一歩、一歩と部屋の中に侵入していく。対して、コチラの足は凍ったかのように動かない。

甘かった。

ソレが姿を現す前に逃げるべきだったのだ。敵わなくとも逃げれば大丈夫、など慢心もいいとこだった。

だが、後悔してももう遅い。賽は投げられたのだ。出来ることがあるとしたら、無力な我が身を呪いながら天に祈る事だけ。

ソレは真っ直ぐイリに向かって歩を進め、両手を天に掲げ――――急降下した。

「みぎゃあぁぁぁぁぁ!!!」

哀れ少女は悲鳴を上げる。

彼の人物は、怪我をしている少女に抱きついたのだ。

「あれ？…まだ治ってないの？」

「…おじさま。そう簡単に治りませんよ」

ジト目で応じるイリ。それに頭を掻く事で答える養父。

そこには父と娘の団欒があるだけだった。

底冷えするような気配が急激に溶けるのを察知し、同時に息を吐いた少年少女は、互いを睨みながら力を抜く。そして心に刻む。

この娘の前で罵詈雑言を吐いたらダメだ、と。

そして、少女は本来の役割に戻って口を開く。

「今から治すよ。患者さんは怪我してるトコ見せてね～」
見知らぬ少女の言った事でようやくイリは事情が飲み込めてきた。
おそらく…いや確実にこの少女こそが治癒術士。少年と知己なのは驚いたが、世界は広いらしいからそういう事もあるのだろう、と納得する。
ならばと、患部に触らぬように包帯を慎重に解く。養父に手伝ってもらいながらもスムーズに解いたイリは、改めて自身の怪我の酷さを目の当たりにした。
腕の9割近くが切断されており、その大部分がうっかり千切れないように糸で縫われている。ここ数日ですっかり慣れた痛みは、おそらく初日に感じた痛みと遜色ないだろう。
そんな酷い有様の腕を見て、露骨に少女は顔を顰めた。そして仕方なさそうに顔を小刻みに揺らして――――自身の腕に剣を振り下ろした。
「えっ？」
腕の怪我の具合は切断さながら。それが見間違いでないことを、床にビチャビチャと落ちていく赤黒い音が知らせる。
イリの顔が青褪めることがオカシイかのように、自らゝ惨憺たる状況をつくった少女は眉一つ動かさない。そのまま唇を歪めた。
「Ｈｅａｌ（癒せ）」

紡がれたその言の葉こそが魔法。時を撒き戻すが如く少女の腕は再生していき、それに連動してイリの腕も治っていく。その奇跡はほんの数秒で終結した。

その結果、腕には怪我があったことをアピールするだけの微細な傷しか残らなかった。

「これは…？」

イリは、完治したと言っても過言ではない自身の腕を眺めて呟く。その瞳には、常識外のものへの怖れや心配が浮かんでいたが、何より強く浮かんでいたのは憧憬。

そんなイリの様子に気が付かなかったのか、術士の少女は不用意な言葉を投げてしまった。

「…患者さんだって使えるよね？」

術士の少女はそれが失言だったと即座に気付いた。

黒の少年が見世物を観賞する目付きをし始め、何より患者の父親の顔が蒼白になったのが目に入ったからだ。

その気付きを裏付けるかのように、患者の少女が声を弾ませた。

「使えないので教えて下さい!!」

「ダメだッッ!!!!」

――――柔和な男が突如放った拒絶の声は、場を凍らせるのには充分だった。

「…何故、ですか？」

それでも、凍ったままではいられない少女がいた。常々『救い』とは何かを模索している少女にとって、人が死なないというのは最低ライン。怪我を治す奇跡（ペテン）。これがあればその最低ラインを満たせるのだ。

だから、普段反抗などしない少女は、この時ばかりは反抗し続ける事を止めない少女となった。

「……ゴメンね。言えない」

「ならば止めないで下さい」

「それでもダメなんだ…」

「止めないでください」

「イリこそ止まってよ…」

「止めないで」

情けなく蹲ったまま男は許しを請うように頭を抱える。だが、少女は苛立ちを瞳に宿らせて、男の行動を憐れに思わない。

その光景を傍目から見ていた術士の少女は、本当にマズイ事をしたとうろたえる。止めようと思うものの何故争っているのかが分からないから止めようが無い。八方塞の少女に出来ることは、誰か来てと願うことのみ。

その期待に応えるかのようにドアが開いた。
「何かあったの？」
反射的に剣呑な眼差しを向けたイリは、養母だと気付くと少しばかり瞳の力を和らげた。養母は異様な雰囲気に早くも気付いたようで、それが顕著な養父に事情を聞き始めた。
幾ばくか時が経ち、無言の時間が終わりを告げた。
「ごめんなさいイリ。私も許可できないわ」
「何故ッ!!?」
両親と自身の理想。選びたくない二つで挟まれたイリは声を荒げる。
今まで見たことも無い剣幕で叫ぶイリから、目を逸らしながら女性は答える。
「ごめんなさい…ごめんなさい」
「あぁ…ぁあああ!!答えてよ!!」
幼い少女が、瞳に涙を溜めて、張り裂けそうな程声を張り上げるさまは誰から見ても痛ましいものだった。それが、いつも笑顔で穏やかなイリだと知っていれば尚更。
イリを愛してるが故にイリをそんな状態にした両親は、当然大きなショックを受けた。逃げたくて逃げてはダメでそれでも逃げたくて――――結局、理性を殴り捨てて愛すべき娘を見捨てた。

乱雑にドアが開け放たれ、閉まっていく音を聞いて、白の少女がどう思っていたのかは分からない。けれど、術士の少女には陳腐な言葉では表せないくらいにショックを受けているように思えた。

なら、掻き回した者としてやるべきことは決まっている。

「ねえ…ガールズトークしない？」

言葉と目線で少年を追い出し、イリの返事を聞かずに横に座って肩に手を回した。

「…近いですね」

思ったよりも少女は落ち着いていた。先程までの様に怒りに震えているわけでもなく、反対方向に振り切れて悲しみに暮れたりもしていない。その姿は自分より年下とは思えない。それでも彼女は傷ついている。傷に年齢など関係無い事はとうの昔に覚えた。

だから、年上だろうが年下だろうが彼女は会話（慰め）を続ける。

「気にしないで話そうよ」

「…はい」

そこからとりとめのない話をした。お互いの好きなものや年齢、この村の事やはたまた明日の天気の事など様々な事を話した。もっぱら白の少女は聞き役だったがときたま微笑んだ。

「ところでさ…名前訊いてなかったね」
　不意に気付いた事をそのまま口に出した。好きなものや年齢は知ったのに、肝心の名前を知らないのは変な話だろう。
　白の少女も、今気付いたと言わんばかりにまばたきした。
「イリです。よろしくお願いします……あなたのお名前は？」
「ありゃ言ってなかったけ？ラヴァエちゃんだよ。よろしくね」
　これが不思議と出会う事が多い二人が、お互いの名前を知った時。まだ、お互いの闇の一端すら知らなかった刹那の時。

第１０話　決別

「あの…聞いて欲しい事があるんです」

それはラヴァエが話し始めてから、初めてイリの方から出た話だった。しかし、その表情は硬くなり、文脈的にも楽しいお話なんてものではなさそうである。十中八九、この部屋が閑散としている原因に関連する事だ。

だが、それこそがこの雑談の目標なのだから、概ね達成できたと考えても良いだろう。

「うん。話してみなよ」

まあ、新たに目標が出来ないとは言っていない。次なる目標は悩みの解決だ。

こうするのは彼女のいつもの癖だ。行き当たりばったりで誘惑しても人は堕ちない事を、嫌というほど学んだからだ。故に彼女は一つ一つ最終目標に向かって詰めていく。

……何かしらの抵抗があるのか、白の少女は二、三度口を開きかけては閉じてを繰り返して話そうとしない。それでも頭を撫でながら待っていると、俯きながらワンピースの裾をギュッと握り締めて語り始めた。

「私…先程、頭が焼き切れそうなくらいに熱を持って、目の前にいる……邪魔者を退けた

いと思ったんです。いつも私を気にかけて下さってるおばさまとおじさまの事を、あの一時だけは明確に敵視したんです。私の中にこんなおぞましい心が眠っていたなんて…知らなくて、いつかこの心がある事で途轍もなく後悔しそうで怖いんです」

そこまで言い終えるとスイッチが切れたように黙った。元より静かだった部屋は、話す者が居なくなると呼吸音のみしか聞こえなくなった。そんな状態が数十秒続いたが、ラヴァエが静寂に溶け込むように小さく口を開いた。

「…君、ううんイリちゃんはとても賢くて…とても無垢なんだね」

壊れ物を扱うような慎重さで、ラヴァエはイリの肩から手を離す。

「本当はもっとゆっくり知った方が良いんだろうけど、これくらいは良いよね」

自問自答を声に出しながらラヴァエは立ち上がり、残忍な目でイリを射抜く。

「イリちゃんが抱いた思い…それは『怒り』だよ。理性によって象られた人を、本能によって暴れる獣に変えてしまうものの内の一つ」

イリは引き止めようと手を伸ばしたが、掴んだのは空のみ。ラヴァエに触れる事を躊躇ってしまった故の結果。何故躊躇ってしまったのか正確には分からない。分かるとしたらラヴァエの纏う雰囲気が徐々に変わってきている、ということだけ。

だが変容が始まった時点で…手が触れようが触れまいが、コレは必然だった。

「…サービスでもう一つの方も教えてあげる。『性欲』…純粋で無垢なイリちゃんの体

を、汚したくて穢したくて堪らないボクの感情。ねえ…意識が混濁するくらいにイリちゃんを侵して良いかなぁ？」

快楽に溺れた粘ついた瞳がイリに絡みつく。

「それでラヴァエさんが救われるなら」

だが、情欲に彩られた少女の艶やかな声すら、無垢なる少女（バケモノ）にはただの声に過ぎない。欲望に塗れた欲求の果てに何があるか理解も、確かめもせずに返事をする。

この少女は本当に無垢なだけなのか？

一度疑念を覚えてしまったらお終い。

ラヴァエは熱に浮かされていた頭が冷えていくのを感じた。

「……分かってるの？イリちゃんの綺麗な体の隅々まで、ボクの指を這わせたいって言ってるんだけど？」

「お好きになさって下さい」

目の前の少女の自分の体に無頓着な答えに、遂に少女の本質を理解した。

この少女がラヴァエのやろうとしている事を理解しているかいないかという些事は関係ないのだと。

少女が『救い』という概念にこだわるのは、幼い子供が人を助ける英雄に憧れるのと同じで微笑ましいものだと思っていた。

それは違う。
この言葉は少女の身に宿った『呪い』だ。この少女は、例え陵辱されようと、例え苦しみの果てに絶命すると知っていても『救い』とう言葉が絡めば受け入れてしまうと、そう信じてしまえる。
それほどまでに敏感に少女の異常を感知してしまえた。
「…どうしたんですか？」
「…ッ」
無垢なるバケモノ（少女）の声に体が強張る。
これ以上、関わり合いになりたくない。己の不幸が霞む――？
「違う」
「え？」
「ボクは不幸なんかじゃない…父さん母さん兄さん姉さんみんなみんないた。みんなボクの体を愛してくれた。ワタシは幸せなの。父さん母さん兄さん姉さんみんなみんないた。みんなボクの体を愛してくれた。ワタシは幸せなの。父さん母さん兄さん姉さんみんなみんないた。みんなボクの体を愛してくれた。ワタシは幸せなの」
本当に『幸せ』なら確かめるまでもない事を、ラヴァエは確かめる為に淡々と儀式を行った。何度も何度も行ってきたのだろう。言葉は滑らかに意味もなく滑っていった。

間違いなく歪んでいる行い。けれど、イリには手が出せない。

彼女は『幸せ』と言った。それが本当ではないのはイリの目から見て明らかだ。だが、あくまでそれはイリの主観であり、彼女の主観ではない。イリの目が正しい保障はないし、彼女の主張が間違っている確証もない。

『幸せ』な人は『救う』ものではない。『救われた』から『幸せ』なのだ。

だから１００％の確証が出来るまで手は出せない。現状維持くらいしかイリには出来ない。

『魔』と遭遇した時もそうだ。

あの時イリは、生き残る為に『魔』を殺す少年を止める言葉を持たず、本能のまま人を殺す『魔』を止める術も持たなかった。

結局、最小限の犠牲で済ます為に、単身『魔』に突撃して無理矢理少年の矛先を逸らすことしか出来なかった。

無論、これも現状維持である。

イリの世界が動き始めたのは感じる。けれど『救う』術を持たず流されることしか出来ない。それが堪らなく悔しい。

人を救う力があれば、魔を救う力があれば、獣を救う力があれば……

この数日それだけを渇望している。

ただ、渇望するだけではダメだという事は知っている。行動しなければいけない事も知っている。

だけど、どんな行動をすればいいのかが分からない。

この矮小な命を捧げてみたところで得るものなど、同じ価値のものしかありえないと確信している。だけど、イリが持っている中で一番価値があるのは自分の命で、それ以外は価値すら見出せないガラクタとも確信している。

全てを救うには己が身一つでは何もかもが足りない。目の前に居る彼女が救われるべきなのかすら分からないのだから。

「帰るね」

唐突に声が聞こえた。

思考の淵から戻ると、正気に戻ったらしいラヴァエが窓から出ようとしているところだった。

「…はい」

「ん、あてにならないかもしれないけど助言を一つ。一度さ…両親に君の思いの丈を打ち明けてみたら？」

ラヴァエは悪戯っぽい笑みを浮かべる。

まるで、数分前まで正気を失っていたなんて嘘の様だ。

「…はい」
　だけど忘れてはいけない。
「じゃあね」
　そう言って飛び降りていったラヴァエの後ろ姿にイリは思う。
　今はまだ私は無力。
　だけど…すぐに力を身につけてあなたを、全てを、正すから。
　――――そのためなら
「おい、あのクソビッチは帰ったな？」
　音もなく定位置にいた少年にイリは決意を持って告げる。
「私を外に連れ出してください」
　親愛など簡単に捨てられる

第１１話　代償つき

「は？」

「ですから、私を外に連れ出して欲しいんです」

二度告げられたその言葉の意味を理解するのに、少年はまばたき二回分を費やした。

理解してまず思ったのが、あの取り乱しまくってた親を捨てんのか、という疑問。

少年としては、保護対象である少女が、何の手段も用いずにしても着いてくるこの状況は非常に望ましいものだが、お人よしを通り越した聖女様が親を見捨てるとは、何ともおかしな事だ。

まあ、面白いくらい盛大に喧嘩したもんだから、聖女様とは言えご立腹なのかもしれないが。

だが、旅立つにしても準備は必要だ。

勿論いつでも旅立てるように最低限の準備はしてある。だから旅立とうと思えば旅立てなくもない。しかし、切迫した事態でも無い限り、補給できるものはしっかり補給すべきだろう。

判断に悩んだ少年は、とりあえず何故外に出たいのかをイリに尋ねる。

「世界を正す為です」
返ってきたのは素晴らしく中身の無い抽象的な返事。
これじゃあ埒が明かん、と少年は知りたいことだけを訊いた。
「急いで出なきゃいけないのか？」
「…はい」
イリは一瞬だけ暗い表情になったが、直ぐに危うい決意に満ちた瞳で少年に訴えかける。
「お前の両親とは喧嘩別れか？」
最後通牒の意味合いも込めて、心残りであろう事をイリに突きつける。
「そう…なりますね」
再度暗い表情を見せたが、またもや立ち直って白銀の目で少年を射抜く。
コレは折れないな。
そう確信した少年は少女の手をとる。少女の手は彼女の固い決意とは正反対で、ふんわりと柔らかくて温かかった。

森の中を走っている。
大人達に出入りを禁じられていた森の中。全方位木々に覆われて視界の利かない森の中。もし『魔』が近くに潜んでいても気付かないだろう。
だが、今のイリが『魔』に命を奪われる心配はない。
鬱蒼として薄暗い中で、立ち止まることなく走り続ける少年が居る限りは。
自身の命の危険がなくてもイリは走りながらも祈る。
どうか『魔』が現れませんように、と。
少年に『魔』が殺されないように、と。
その祈りが届いたのかは定かではないが、馬車が見えるまで『魔』は現れなかった。
そうなると、気になるのは初めて見る馬だ。
栗毛、と言うのだろうか？

茶色っぽい毛で全身を覆っている馬は、ちらっとイリを見ると、興味ないと言わんばかりにすぐに顔を正面に向けた。

それが悔しくて馬の正面に回ると、再度馬は顔を逸らす。それを再度追うと、また馬は顔を逸らす。追う。逸らす。追う。逸らす。追う逸らす追う逸らす。

「何やってんだ…とっとと来い」

いつの間にか夢中になっていたようで、声に反応して振り向くと、少年が呆れた顔でイリを見ていた。

この勝負は馬の勝ち。次は負けない、とイリは決意を燃やしながら白い布（？）で覆われた荷台に乗り込む。

中は少しだけ埃っぽく、左の隅っこの方には乱雑に衣類が積み立てられていた。

少年はというと、右の隅っこの方に腰を下ろしていた。イリが入ってきたのを確認すると、御者であると思われる男に出発の旨を伝えたようで、イリが何となく少年の隣に腰を降ろすと同時に、馬車はゆっくりと動き始めた。

動き始めて数秒で、すぶり、と覚えのある気配を察知してイリは腰を浮かした。

「『魔』が…」

そうだ…何をのんきに座っていたのだろう。

こんなに大きな物が大きな音を立てて移動したら直ぐに気付かれるに決まっている。

イリは縋るように少年を見る。
「黙って座っていろ」
少年は石の様に座っているだけ。
…つまり。つまりは、今どちらが危険なのかは考えるまでも無い。
感情のまま飛び出そうとして――――少年に腕を掴まれて無様に転んだ。
「ッ!!何で!!」
「言ったよな。お前が出て行ったところで何も出来ない。お前に出来るのは見ることだけだと」
理解している。
理性では骨の髄まで理解している。
だが、感情が納得していない。
もしかしたら、という１％に脳が支配される。
できっこない。それを叩き込んだばかりなのに、そんなの知るかとばかり、反骨心だけ高い。
何も出来ない自分が嫌で、それを理解していながらもしかしたらに賭けている自分が惨めで、意味も無いのに涙だけは流れる。
涙を流しても、段発的な血飛沫の音は消えないし、少年が腕を放してくれることも無

い。やっぱり意味も無い。

「…力を下さい」

それを自覚したら言うしかないだろう。元より『救う』ためなら命すら使い潰す身。プライドなんて無いし、遠慮なんてしない。図々しくても、敬遠されても『救う』力が手に入るなら痛くも痒くも無い。

「……」

その目は何？

憐れみ、恐怖。その二つは混同しないもののはずでしょう？

ましてや私にぶつけるものでもないでしょう？

それなのに私はその目に納得している。

『人』としてそれは正しい、と。『獣』としてもそれは正しい。『魔』としても正しいかもしれない。

全てに共感を得られない感情。それが我が身に宿っている事にはとうの昔に気付いていた。

だから、自身を騙して外を見ず、私を囲って外を見せず。そんな村の生活で、異常性が発露することは無く、ただの少女でいた。

だけどもう、縛る鎖は無くなってしまった。外界の残酷さを纏って村を訪れた、この

少年とラヴァエさん。その時点で私を縛る鎖は機能しなくなってしまった。
意図して見なかった外の殺戮を見て、村では見られなかった心の闇を見て、私は悟ってしまった。
もうただの少女ではいられない、と。
「……はぁ。分かった」
この少年が『魔』を殺している場面に出くわさなかったら、ただの少女でいられた期間は延びたのだろうか？
「ありがとうございます」
答えは決まっている。
世界の厳しさに目を背けている期間が延びても嬉しくない
つまり、私はそういう生き物。
おそらくきっと世界を救う生き物。今はまだ修行中。
「よし、魔法について教えてやろう」
「ありがとうございます!!」
声を張り上げれば元気になれる。
それが空元気だろうと、気持ちが上がっていく事に変わりは無い。
幸い…というと複雑な気分だが、外はうるさい。少しくらい声を張り上げたって、む

しろ聞こえやすいくらいだろう。
現に、少年は全く気にして風もなく講義を開始する。
「第一に、一回腐れビッチの魔法を見て分かってると思うが、魔法は何の代償もなしに発動できるモンじゃない」
そう言うと、少年は一度口を噤んで前方の山に向かって手をかざした。そうすると、突然黒い手が少年の手の平の真ん中から生えて、積み重なっている衣類の最上段にあった外套を掴んで、手元に引き寄せた。
「お〜」
何となくパチパチと手を叩く。
「これも魔法だ。これは自分の体から影の体を出すっていう魔法なんだが、コレにも代償はある」
そう言うと、少年は自分の手の平をイリに見せる。
顔を近づけて手の平を見てみると、影の手が生えていた部分が黒く染まっていた。
「代償としては軽いモンだが、本来の手が影の手に置き換わってしまっている」
「あの、もし全てが影の手に置き換わってしまったらどうなるんですか？」
イリの疑問に少年は簡潔に、尚且つヤバさが伝わる言葉を残してくれた。
「影の自分に体を乗っ取られる」

「……実例があったのですか？」
「…ああ」
イリはギュッと、小さな体で少年を抱きしめる。
「何して――」
押し返そうとした少年の動きが止まる。
「いなくならないで下さい」
泣きそうな声で呟かれたその言葉が、例え全ての人に言うものだと知っていても、冷たい態度で突き放せなすことを出来なかった。
「死ぬつもりはないさ」
少年に出来たのは、答えをぼかす事。
確約出来るほど平和な暮らしをしてきたわけではないから。むしろ、あの日からずっと闘争の中に身を置いてきたのだから。
「…説明を続けるぞ」
湿っぽい空気を引き摺ったまま少年は話し続ける。
「腐れビッチの回復魔法の代償は、相手と同じ回復効果を受けてしまう、というものだ」
……？
あまりピンと来ないイリの様子を見て少年は、一度見た光景を思い出せと言った。

再度挑戦。

…彼女はイリの傷を治す前に何をした？

彼女は……自身の腕を斬りつけた。まるで、イリと同じ傷をつくる様に。

つまり、彼女の行ったことは代償の軽減。今度は、軽減する意味があるのかを疑問に思う。

「…治っているものを無理矢理治そうとすると、体内のあらゆるものが増える。血、骨、筋肉、臓器。その先にあるのは、人間の心を持った化け物の誕生だけだ」

イリの疑問に先回りする形で少年は末路を語る。淡々と、知識だけでなく経験を携えながら。

「まあ、魔法には代償が付き物ってことだ…それでも、本当に魔法を覚えたいか？」

「はい」

予想された返事だったのか、少年は一切表情を動かさずに溜め息を吐いた。

その間にも外の戦闘音は響き渡る。雑多な音が多くて、イリには何が立てた音なのかは判別できなかった。だが、一つだけ判別してしまえるものがあった。

それは絶叫。多くは『魔』の死に際の悲鳴。その中にぽつぽつと『人』の悲鳴も混ざる。

聞こえなければよかった、なんては思えない。悲鳴の数は見捨てた命と同じ。一つ響

くたびにイリの背後に纏わり付いて、囁く。
お前が見捨てたから死んだ
その怨嗟の声は一瞬で掻き消えて、後には静寂しか残らない。だが、その一瞬でイリの全身を揺らし、魂に忘れられぬように楔を打つ。
そうして無視できぬ重みとなってイリの一部となる。
それでいい
罪は正しく認識して、正しく裁かれなければならないから。
「…魔法を扱うには、自分の体に張り巡らされている『線』を認識する必要がある」
少年の耳にも命が消える音は聞こえているはずなのに、平時と変わらぬ声色で話を続ける。
「『線』ですか？」
だからイリも同じ振る舞いをする。
罪の楔を打たれても空っぽの笑みで日常を演じる。
「人の体には様々なものを運搬する、血魔線（ちません）と呼ばれるものが全身に張り巡らされている。運搬しているものの全てが解明された訳ではないが、今のところ分かっているのは二つ。命名の理由となった血と魔力だ」
「…つまり、私の体にある血魔線というのを認識すれば……」

そこまで考え付いて気付いた。見えてないのにどうやって認識する？
まさか、知識だけで見たこと無いものを認識しろとは言わないだろう。
イリの言葉が止まったのを見て、少年は上々とばかりに口角を上げた。
「そう、血魔線は体の中だ。見るのは至難の技だろうな」
「…どうするんですか？」
イリの中で嫌な予感が沸々と強まる。
「外にいっぱい新鮮な死体があるだろ？」
予感的中。
ついでに、この人とは一生相容れないな、と骨の髄まで理解した。

第１２話　魔法特訓ただ傍観

「最悪な気分です」
少女は額と口元を押さえて、青い顔で呟いた。
「吐くなよ」
少年は隣の少女など気にしないで、済ました顔のまま血濡れの剣を磨く。
日は既に傾きかけていて、最後のひと頑張りとばかりに全力で大地を緋色に染める。
馬車の中、少女は血魔線の見物を終えて疲弊した精神を休める。
そんな少女の状態を慮ることなく、少年は講義の再開とばかりに口を開く。
「んで、血魔線がどんなモンか分かったよな？分かってなきゃ、分かるまで見せるだけだが」
「…分かりましたよ」
「ならいい」
そう言うと、少年は先程影の手で引き寄せた外套を持って、元の位置に戻した。
「これを影の手で取ってみろ」
「どうやってですか？」

……暫し静寂。

「…悪い。教えてなかったな」

気まずそうな顔をして、少年は再度イリの隣に腰を下ろした。

「説明し忘れていたが、魔法を扱うにはもう一つ必要な事がある。それは『概念』だ」

少年は言葉を切って、腕を上下に動かす。

イリはその動きが『概念』にどう繋がるのか理解できずに、困惑した眼差しで少年を見る。

「まあ難しいだろうな」

少年はそう感想を漏らすと、頭を捻りつつ説明を再開した。

「今の動きで…いや、俺の動きで様々な『概念』が発生した。例えば、腕を動かす事で『動き』という『概念』だったり、『風』…腕を動かすと風が発生するだろ」

嗚呼クソッ、と悪態を吐きながら言葉を捻り出す少年を見兼ねて、イリは自分なりの言葉で纏めてみた。

「あの…腕を動かすことだけでも、『動き』そのものでしたり、『動き』によって発生した『風』など、その他様々な『概念』が発生する…ということですよね？」

イリのまとめを聞いて、少年は口を開けて固まった。再起動した後、え、とか、あ、とか変な呻き声を出した挙句

「…お前、アホじゃなかったんだな」
　という大変失礼な言葉を頂いたので、イリは無言の抗議として頬を膨らませて少年を見つめる。
「さて、そんな『概念』を自身の体の血魔線に取り入れる。そうする事で初めて魔法を使えるようになる」
　イリから視線を逸らす事で、無言の抗議を見なかった事にした少年は言葉を続ける。
　イリはこちらを見るまで、少年の周りを駆け回ろうかと考えたが、そんな子供じみた事よりは魔法を覚える方が大事だと自身を納得させて、膨れっ面のまま話を聞く。
「大前提として血魔線に触れる…つまり、傷をつけないと『概念』は取り込めない」
　少年は手の平をイリに見せる。
　先程、魔法を使うのを見たときには気付かなかったが、そこには確かに数ミリばかりの切れ込みが入っていた。
「しかも、取り込んだ『概念』は血の流れにのって体を一周してくる。これの所為で魔法を使う度に血魔線は『概念』に侵される。『炎』であれば軽く焼かれ、『回復』であるなら血魔線が増強され、やりすぎると千切れる。ようは代償は二つあるってこった。外面に現れる代償と内面に潜む代償。魔法使いはコレと一生付き合う羽目になる」
「それで、どうすれば『概念』を取り込めるんですか？」

迷うそぶりも見せなかった少女に、いい加減慣れてきた少年は剣磨きを再会しつつ喋る。
「こればっかりは感覚論だが、一つ助言をするなら傷口から徐々に全身へと実現したい『概念』が巡っていくさまを想像しろ」
「分かりました」
短く返事をしたイリは、早速とばかりに手の平を食い千切る。でろでろと流れ出てきた血を見て満足げに頷くと、目を閉じて集中し始めた。
実に自然な動きだな、と遠い目で少年はイリを見つめる。
どれくらい時間がかかるかは不明だが、一日くらいはかかるだろうと見当をつけた少年は、剣磨きをゆっくり丁寧にすることを決めた。
「もし…お客さん」
そんな矢先、陰鬱な雰囲気を纏った御者が声をかけてきた。
「何だ?」
作業を始めたばかりだったので、一度剣を置いて応対する。
無言で差し出されたのは、闇に溶け込む黒さをもつ鳥。御者に近づいて受け取ると、鳥は体を震わせて手紙を落とし、無言で木々に紛れて姿を消した。
まるで、イリに見られないようにタイミングを計ったかのように届いた手紙の宛名は

少年。署名は空白。
その時点で察しがついた少年は、少女がまだ目を閉じている事を確認すると、素早く読み始めた。
幸いにして内容は相変わらず簡潔。

『合流』
無事聖女を保護したようだな。メリジワハオで待つ。

たったそれだけ。
てっきり聖女の扱いについて命令があるかと思ったが、どうやら必要ないらしい。状況を把握されている不気味さより、何故か命令がない事に不気味さを覚える。
メリジワハオ。『人』の国であるアインの首都であり、軍事力・経済力共に最大規模の都市である。そのため様々な人が入り乱れて、歩道がすし詰め状態になることもしばしばある。
そんな個人の特定が出来ない場所で待つ、と言われても聖女を見つけ出せるのか？
……いや、見つけ出せてしまうくらいの依頼者なのだろう。
少年はその先を考えないようにして寝転がる。手入れの途中の剣が目に入ったが、ど

うも体がだるくて起き上がりたくない。
一本ダメにしてもいいか、と目を閉じかけた時、視界の隅で白いものがもぞもぞと動いているのが見えた。
「あの…寝ていますか?」
控えめに声をかけて来たのは、考えるまでもなく少女。体を左右にフラフラ揺らしながら声をかけるタイミングを見計らっていたらしい。
このまま無視して寝ようか、と考えかけたが、タイミングを見計らったかもしれない鳥と確実に見計らった少女。
その一致しているようでしていない二者が面白かったので返事をする。
「寝てはいない」
「あ…そう、ですか」
見る見るうちに声を小さくしていく少女。
無視して寝ていた方が彼女にとっては都合がよかったらしい。
今からでも寝てやろうか、と考えてバカバカしさに一人口元を歪める。こんな馬鹿げた思考に浸れるくらいには平和ボケしている。
戦場に戻る日は遠くない。むしろ、この少女が原因で巻き込まれる可能性だってある。今から凄惨な光景を自らの手で作り出す覚悟を決めていなければならない。

だからこそ、平和などというもの忘れていた方が良いのだが、否応なしに少女は思い出させに来る。

小さく溜め息を吐く。

何でたった一人の少女にこれだけ振り回されなければいけないのか。

「…すみません。横になりますね」

小さな溜め息から何を勘違いしたのか、少年から離れて困ったように眉を下げて、少女は笑う。

その悲しい笑みは、繰り返し行われてきたのか、とても洗練されているように見えた。

目を閉じて思索に耽る。

幼い少女はずっと他人を気遣っていたのだろうか。いつも笑って誤魔化して、なんでもないと嘯く。それが聖女たる所以なのだろうが、どうも同じ人間とは思えない。

…いや、同じ人間ではないのかもしれない。そう思えるくらいには少女は生への渇望が無い。

自分の死で誰かが救えるのなら簡単に死んでしまう事は、我が身を犠牲に『魔』を庇った時点で嫌と言うほど理解した。

そんな彼女を伴ってメリジワハオに辿り着くのは、途轍もなく骨が折れることだろ

う。だが、その長い旅路できっと彼女は様々な物を見て、思いもよらない成長をするだろう。それをいの一番に見て、知る事ができる。

そう思うと、今現在悩んでいるであろう少女には悪いが、ほんの少しだけ心が躍る。きっと、彼女の目に映る世界は美しいのだから。

「起きろ。蹴り起こすぞ」

がたんごとん、と慣れぬ振動。素っ気無い男の人の声。

どうしようもなく、見知らぬ世界へ飛び出したことを自覚させられる。

このまま二度寝でもしてしまおうか、と思うが、した瞬間に有言実行すると確信できたので眠気を引き摺りながら起き上がる。
ぼやける視界に映るのは、薄汚れた空間と名も知らぬ少年の顔。
名も知らぬ……？
たった今気が付いた。
知り合ってから一週間近く経とうとしているのに、肝心の名前を知らない。
これはマズイ事だとイリは考え、それ以外の思考を放棄して感じるままに声に出す。
「おはようございます!!お名前は!?」
「…何言ってんだ？」
当然の様に纏まっていない言葉は、当然の様に疑問で返される。
冷静な少年を見て、勢いのままに口に出したのが恥ずかしくなってきた。
それでも、一度気付いてしまったからにはやり通す。
「すみません…お名前、聞いていない事に気付きまして…」
勢いが不時着間際であることは気にしてはいけない。
イリの尻すぼみな声に、少年は神妙な顔をして考え込む。
数秒経ち、イリが撤回しようとした瞬間、少年は観念したようで口を開く。
「クロスでいい」

自己紹介にしては随分投げやりな返答をもらったが、イリはお構いなしに笑う。
「イリです。よろしくお願いしますクロスさん」
今更な自己紹介と共に差し出された手を、クロスは溜め息と共に握った。
視界に広がるのは満面の笑み。
昨日の夜の儚い雰囲気はどこに飛んでいってしまったのか。少年はその一点がもの凄く気になった。

第13話　初めて

「おやすみなさい」
「ああ」
相変わらず素っ気無い少年――――クロスの返事にイリは苦笑する。これがこの少年の性格と言えばそうなのだが、少しくらい愛想というものがあってもいいのではないか、と思う。
そんな夜。馬車での生活も早いもので五日経とうとしている。
この五日間に特筆すべき出来事はなかった。
強いて言うのなら、よく分からない生き物の干し肉は食べる度に味が変わるという事を知ったくらいで、他は五日前と何も変わらない。
つまり、魔法を使えるようにはなっていないし、『魔』と『人』の争いは止む事は無かった。
「そうだ。一応伝えておく」
眠る前の考え事に浸っていると、クロスの声が耳に届いた。
「明朝にはイサショという小さな村に着く」

聞いた瞬間は、何を言っているのかが分からなかった。
村。そう、イリの住んでいた村以外にも村がある。それは想像もしていなかった常識だった。
よくよく考えればここは『人』の国。村が一つしか無い、なんていうのはあり得ない。国として纏まる意味合いが無くなる。だから、村ないしは町なんかが複数あるのは当然の事だ。
１２年も生きてきて、この国のことすらたいして知らないというのはどうなんだろうか？
「そこで減ってきた食料なんかを補充するから、大人しくしていろ」
クロスは言葉を続ける。
だが、イリの耳には一語たりとも入っていっていなかった。
頭を占めるのは羞恥。
村に閉じこもって本を読み漁っただけで、全てを理解した気になって満足していた知識。でも、実際に理解出来ていたのは過去の知識。一番大切な現在の知識が不足している。
それ自体は、まだ勉強不足という事で無理矢理水に流せた。
だが、一番恥ずかしいのは今に至るまで全く気が付かなかったことだ。

世界を正そうとする人が知識不足とは、笑止千万を通り越して、正す気持ちがあるのかコイツと思われること間違い無しである。

この世界のことを大して知らないくせに、世界を正すなどとのたまった過去の自分は大層滑稽だっただろう。

だが、撤回するつもりはない。

ラヴァエの歪みを放置した世界。人・獣・魔の間に格差を引き起こし放置した世界。

それが正しいとはどうしても思えない。例え小娘の戯言だとか虚言だとか言われても、これだけは曲げてはいけないと思う。

そんなことを考えている内に、眠気の沼にイリは引きずり込まれて、そのまま脱出を諦めた。

「起きろ」

その言葉だけでイリの意識は覚醒に向かう。

一度睡眠の快楽に負けた際、この少年は無言でイリの頬に平手打ちをした。その威力の凄まじい事、あれから数日経った今も、ふとした瞬間にヒリヒリと痛む。

その悲劇を繰り返さない為にも、クロスの声が聞こえたら即座に起きる。イリは学ぶのだ。

体を起こすと目の前には相変わらずの干し肉。

今日の干し肉は美味しいだろうか、と半ば運試しの様な気分で手にとる。

イリが口を開いたタイミングで、クロスが口を開く。

「もう数刻もしない内にイサショに着く。食い終わったら降りる準備をしておけ」

イサショ。

なんてことのない小さな村なのだろうが、イリには特別なモノに見える。

自分が住んでいた村以外の村。まだ見ぬ人々の営み。まだ見ぬ景色。

その全てがそこに集まっている。

そう思うと居ても立ってもいられなくなり、思わず心の準備もせずに干し肉を齧ってしまった。

結果として、途轍もない酸味を味わい、暫くもだえることとなる。

もだえ終えた後、気を取り直して荷物の整理を始める。とは言っても、イリがするべき事など大して無い……どころか全く無い。伊達に着の身着のままに飛び出してきた訳ではない。

と、自慢できないことを自覚しつつも、事実なので反証はしない。

だから出来ることといえば相変わらずの魔法修行。

心を落ち着けて精神集中とは言っても、上手くいっていない現状、集中など出来るはずも無く魔法を使えない理由ばかり捜し求めてしまう。

血魔線の認識はした。だが『概念』の受け入れが上手くいっていない。魔法が使えないのはこれが原因だ。

つまり、『概念』を受け入れる知識が必要だ。

だが、イリの周りに居る情報源などクロスくらいしかいない。そのクロス相手に初日の時点で尻込みして質問できなかった。

そこまで思考を回すと一つの疑問が浮かぶ。

『概念』とは一体何なのか？

『概念』とは一口で言える。だが、イリの個人的な考えだと『概念』とは世界に等しいもの。天と地、時間と空間、現世と幽世、それら全ては世界の構成要素であり、『概念』と呼べるものなのだから。

だが、世界と考えると規模が大きすぎて、この小さな身体に取り込んだ瞬間、身体が内側から破裂してしまいそうな想像がイリを取り巻く。

そう思うと足が竦む。

世界を正すには止まっている時間などあってはならなくて、その事は分かっているはずなのに、本当に進んでしまっていいのか考えてしまう。

つまるところ怯えているだけ。

この怯えが解消されれば魔法を使うことは出来る。その確信はある。

だけど、肝心の怯えを解消する手段については皆目見当つかない。

八方塞りな現状を嘆くことしか出来ない。

軽く小突かれる感覚で、イリは思考の淵から浮かび上がる。

目の前には、刃渡り１０ｃｍ程のナイフを無言でイリに向けているクロス。その目的が分からないイリは、ただクロスが次の行動を起こすのを待っているだけ。

１０秒、２０秒と過ぎて、３０秒でようやくクロスは口を開いた。

「護身用だ。早く受け取れ」

その声は呆れを含んでいたが、呆れているのはイリも同じだ。
人に渡す刃物を、剥き身の刃のまま人に向けて、受け取るとでも思ったのだろうか？
イリ自身、自分は常識を知らないと認識しているが、こればかりは自分の方が正しいと思う。だが、念の為という言葉がある。イリは本当に正しいのかどうか自分の記憶と照らし合わせてみて気付く。
怪我をしても魔法で治せるではないか、と。
自分の常識の無さに内心頭を抱えつつ、これ以上クロスを待たせない為に急いでナイフを受け取る。武器を振るう気は未だに持てないが、力こそが正しいと認めた暁にはお世話になるだろうと思い、ナイフの様子を観察する。
ナイフは良く磨かれているようで、微妙に落ち込んでいるイリの顔が白金色の刃の内から、常識外れの間抜け、とイリに突きつけて馬鹿にする。
これ以上落ち込まないためにもナイフを仕舞おうと思い、首を傾げる。
これはどこに仕舞えばいいのだろう？
そんなイリの疑問に答えるように、懐を漁り始めたクロスが口を開く。
「服の裾を持って太ももが見えるようにしろ」
この要求を普通の少女に言っていたら、叩かれるか逃げられるか通報されるかの三択であろう。だが、ここにいるのは『聖女』。常識外れの思考を持ち、独自の感性で動く生

き物。故に『人』の常識には当てはまらないだろう、とクロスは考えて、特に気遣うことなく要求した。

その結果として、イリの頭は混乱に陥っていた。

裾を上げて、太ももが見える位置まで上げて、何が見える？

下着が見える。

それがどうしたの？

恥ずかしい。

それがどうしたの？

恥ずかしい。

それがどう――？

恥ずかし―。

それ――？

恥ず――。

――？

――。

完全なる自問自答の答えの出ない問いかけの連鎖。

イリは裾を摘んだまま静止していた。

そんなイリの様子など露知らず、ようやく目的に品を見つけたクロスは顔を上げる。目に映るのは体中の血を集めて真っ赤になった顔で、ワンピースの裾を摘んだまま固まっている少女。

その様子から、クロスは自分の考えが間違っていたことを認め、恥ずかしさに震えている少女にフォローの言葉を口にする。

「よく見えていたから今更気にするな」

この少年、女の機嫌が悪い時は生理の時、とのたまう阿呆である。そんな少年の放った一言は、特大の刃となってイリに突き刺さり、思考さえも停止させた。

そんなイリの様子にやはり気付かず、あまつさえ未だ動こうとしないイリに焦れて、彼女のワンピースを豪快に捲り上げた。

「ひっ!?」

突如感じた下半身の開放感に、思考停止という逃げ道すら奪われた。

半ば諦めに近い気持ちで目線を下げて、ワンピースの裾を頭に乗っけたまま作業をし始めた変態（クロス）

を視界に収めたイリは、乾いた笑みを作ることしか出来なかった。

そんな拷問の時間が数十秒続き、イリの精神が完全に叩きのめされたところでクロスの作業は終わった。

イリの太ももにはナイフケースが付けられ、一片の汚れ無くキラキラと輝くナイフが静かに収まっていた。これでナイフの収納場所に困る必要は無くなったが、こうなるならナイフなど意地でも貰わなければよかった、とイリは項垂れる。

「そのナイフは隠し持ってこそのものだ。お前の下着のように簡単には見せるなよ」

落ち込むイリに容赦無く追い討ちを掛けるさまは、正に鬼畜であった。

「降りるぞ」

イリの精神状態など全く持って理解していないクロスは、そう言って項垂れているイリの手を引く。

「自分で降りれます」

イリはほんの少しぶっきらぼうに応えて、繋がれた手を振り解く。

少しだけ悪いことをしてしまった、と思ったがその勢いのまま、馬車から飛び降りる。

眼前に広がる景色に興味を覚えるものの、罪悪感から黙ってクロスに着いていくことにした。

馬屋を抜け、ポツリポツリと建つ家々の間を抜け、朝なのに薄暗い場所に着く。

そこは、木造の一軒家で看板も何も付いておらず、本当に食料が補充できるのか疑わしい外観をしていた。

クロスはそんな怪しい所のドアを躊躇いもせずに開け、振り返ってこう言った。

「ここで大人しくしていろ」
そうして、イリの返事も待たずにドアの向こうに消えていった。
ここまで怪しい臭いが嗅ぎ取れると、突っ込んでいく気も無くなる。おそらく、人様に迷惑を掛けることはしていないのだろうから、悪を嗅ぎ取れる知識を得るまでは黙殺しておくことにした。
さて、そうなるとやることもない。
となると魔法の練習しかないのだが、問題解決の糸口すら見つかっていない現状では練習どころではない。
問題解決の糸口を考えるにしたって、結局はイリ自身の心の問題であり、考えたところで深みに嵌るだけである。
やっぱりやることがないと判断したイリは、拾った枝で地面に落書きをし始めた。
人の形を書いて、あまり思い出したくはないが覚えている限りの血魔線を走らせる。
さて、この血魔線にどうやって『概念』を――？
不意にイリの背後に人が現れた。
クロスかと思い、振り向こうとして――首元に鈍色のナイフを当てられた。
「動くな」
低い声。男性だということは分かったが、それ以外は全く持って分からない。

「あなたは誰ですか？」

故に質問した。声を出すことは禁じられていない。

だが、イリが声を出した瞬間、体を揺らした男は殺意を滲ませた声を出す。

「死にたくないのなら喋るな。歩け」

動くなと言ったり、動けと言ったり何だか無茶苦茶な人だなぁ、とイリは剥き出しの素足を蹴られながら思う。考え事を中断して動き出すと、足の攻撃は止まった。

向かう先は不透明。見えるのは男にとって都合の良い場所に連れて行っているということだけ。首元にナイフを突きつけられたまま歩いて１０分程経っただろうか。イリの足を再度蹴ってイリを止めた男は命令を下す。

「服を寄越せ」

思わず、今日は厄日だ、と溜め息が出る。意識せず出た動きだったが、今この場でそれは不味い行動だった。

額に痛みが走る。その意味を理解しきる前に、額から垂れてきた血が教える。首元を見るとナイフはそこに無く、目の前にあった。

「嘗めるな。次は目を抉るぞ」

その声は殺意以外の感情を窺わせることなく、有言実行を本気で行うことが嫌でも分かる。

この場面において、イリは初めてこの男に恐怖を覚えた。
『魔』は純粋な殺意をぶつけてくる。そこには殺す以外の目的は無い。けれど『人』は違う。殺すまでの過程に、いたぶりを加える事が出来る。
それをこの男の言葉で気付いた。今、もう一度イリが溜め息を吐いたら容赦なく光を奪われる。それが逃げ出したくなるくらいに怖い。けれど逃げ出す余地など無い。
ふと、護身用ナイフの存在を思い出す。服を脱ぐと見せかけてナイフを取り、この男を切りつける。男は予期せぬ反撃にうろたえるだろう。その隙を突いて逃げ出せるかもしれない。
そこまで考えてイリは吐き気を堪えた。
人を切りつける。何を言っている？世界を正そうとするこの手で、正さなければいけない傷害を行うのか？
それは自身への冒涜だ。
「早くしろ」
再度響く声に体を震わせる。
脱衣の恥辱と逃亡への誘惑を纏めて諦めて、服に手をかけ脱ぎ去る。直接外気が体に触れる感覚に、他人の前で服を脱ぎ去ったという現実を突きつけられて、頭が恥ずかしさでいっぱいになり俯く。

この時間が一秒でも早く終わりを迎えることを祈ることしか出来ない。
イリの祈り空しく、男は何もしない。そう、ナイフへの言及は無いし、それどこか声すら発しない。
怪訝に思ったイリが顔を上げると、視界いっぱいに男の顔があった。驚いたイリは咄嗟に後ろに下がってしまった。
瞬時に失敗したと悟った。殺意に駆られた男による数秒後の惨劇は免れない。せめて最後まで記録するためにと目に力を入れる。
だが、予想とは異なり、男は魂を奪われたかのような呆けた顔でイリを見ていた。
これは逃げても大丈夫だろうか？
あまりに男が呆けているものだから、イリの中で逃亡への欲求と男への恐怖が衝突を始める。何度かぶつかる内に逃亡へ比重が傾いていきいざ逃げようとした時に、男はイリに触れようと手を伸ばし――――親指以外を切断された。
傷口から溢れる血が地面を汚していくのを目に留めさえせずに、幽鬼のようなクロスがそこに立っていた。右手には愛用の剣。熱心に磨かれたおかげで銀色に輝いていた刀身は、紅で彩られていく。
刀身に注意を払うことも無く、男だけを見つめる。その表情は無に近い。ただ怒りだけはこの場にいる誰しもが感じ取れる。

男は夢幻のような気持ちから覚め、容赦の無い現実を向き合う。
現実は怒りだけを男に伝える。
その怒りは殺意と大差なく、自分の体の震えからどれ程の怒りを抱えているのかを敏感に感じ取る。体から分かれた指への未練も、傷口からの痛みも今はどうだっていい。今はただこの現実の怒りを鎮めなければいけない。一歩対応を誤れば殺される。それだけは御免だ。
少年は殺意を、男は生への渇望を宿し互いに向き合っていたために、一番目を離してはいけなかった少女を注意していなかった。
ぶちゅり
とても不快な音が響く。
ぶちゅり
響かせてはいけない音が響く。
ぶちゅり
音の主を探し、二人の男がそれを見つけた。
ソレは人の形をしていた。ソレは少女の姿をしていた。ソレは機械的に同じ作業を行っていた。
ぶちゅり

自身の手で、自身の指を切りつける。一度二度三度、彼女の望む形になるまで何度でも。

ぶちゅり

不意に少女の動きが止まる。傷口を愛おしそうに見つめ、ナイフを捨てて男たちの方へ歩み寄る。

一歩、二歩。不出来なペンキで地面を汚しながらも、確かな歩みで近づく。

少年は本能的に少女を避ける。すれ違いざま、微笑んでいる口元を見て総毛立つのを感じて。

ターゲットである男は最早夢幻と現実の区別すらつかない。それでもこれは夢だと信じ込む。そうしないと悪夢のような現実に押し潰されてしまいそうだから。

ついに少女は男の前に辿り着き綺麗な手で、血が噴出している男の手をとる。

そしてそのまま声を出す。

「Ｈｅａｌ（癒せ）」

未だ成し得ていない奇跡（ペテン）を唱える。

それは疑う余地も無く成功し、男と少女の手の傷は治っていく。夥しく流れていた血は止まり、少女の指は不恰好ながらも動かせるくらいには回復した。だが、男の指は生えることは無く、その空白は埋まらない。

それを不思議そうに眺めた少女は、更なる治療のためにナイフを振りかぶり――――――少年に止められた。

「何故止めるのですか？」

「欠損したものは治らないからな」

「なら何故指を切り飛ばしたのですか？」

少女は問いかける。その声色に怒りを宿しながら。

対する少年は嗤う。あまりに『人』としてオカシイ思考回路に。

少年はもったいぶるように血に濡れた剣をしまい、一層笑みを深めながら答える。

「お前が危険に晒されていたからだ。それをよく覚えておけ『聖女（化け物）』」

「……分かりません。確かに私は危険を感じました。けれど、ソレがどうしたんですか？

私を使い潰すことで人が幸せになれるのなら、私の意思なんて無視して使い潰すべきでしょう？」

理解に苦しむ、といった顔で『聖女（化け物）』は言う。自分を他者の食い物にしろと言う。それが当然で、それ以外に道は無いと彼女はそう思っている。

彼女が苦しむことで、同じく苦しむ他者がいることが分かっていない…いや、少年の

発言から感じとれていない。
少年はそれを理解させようとは思わない。彼女は荒唐無稽な夢に向けて脇目も振らずに前進していて欲しい。だから進むべき道はしっかり見定めて欲しい。
これは老婆心というものなのかね、と自分に呆れながらも口を出す。
「お前は矛盾しているよ。全ての生き物を救うと言いながら、たった一つの命のために自分を使い
潰そうとする。お前にとってどっちが大切なんだ?」

第１４話　忌むべきもの

「お前は矛盾しているよ。全ての生き物を救うと言いながら、たった一つの命のために自分を使い潰そうとする。お前にとってどっちが大切なんだ？」

クロスが告げたそれは、イリが全く考えたことのなかった事だった。

全ての生き物を救う。それは崇高な夢。

一つの生き物を救う。それは大切な行為。

けれど、前者のためには自分の命を秤に乗せる事すらしてはいけない。だけど、後者は前者の一部であり、後者を捨てたら前者を成し遂げられなくなる。

以前、あやふやな問題は時が経てば分かることがあると思った。時が経てば今よりも確実に、過ぎた時の分だけの積み重ねがあるから。

けれど、この問題は時が経てば分かるものなのか？

既に答えは出ていて、それに納得したくないだけの話なのかもしれない。

それとも、始めから答えのない問題なのかもしれない。

こんな事を考えていても、全か一、どちらが大切なのか答えは出ない。

こんな簡単な矛盾を今まで自覚していなかった事と、知識の足りなさを再度突きつけられた感覚に頭を抱えたくなる。
「…悪いな。こんな質問して」
イリが考えに耽って答えを出せずにいると、クロスは申し訳なさそうな顔をして謝る。
イリには、何故クロスが謝るのかは分からなかったが、自分のせいで謝っている事だけは分かった。自分の不甲斐なさに唇を噛みながらも、答えが見出せないから何も言えない。それが本当に悔しくて、答えが出せない自分にイラついて、溢れ出そうな感情の穴を塞ぐので精一杯になる。
「…いえ、すみません」
だからこう言って俯くことしかイリには出来ない。ここで涙を見せたら、おそらくクロスはまた謝る。
ぶっきらぼうな態度からは想像出来ないくらいに彼は優しい。優しくなければ謝ることなど出来ないはずだ。
「それはそうと、だ」
唐突にクロスがわざとらしく前置きをおく。
イリは疑問符を浮かべながら続く言葉を待つ。

「アイツ、逃げたみたいだな」
イリの背後を指差しながらクロスは言う。
振り返ってみると、いつの間にかあの男は消えていた。男が居た痕跡を示すのは、錆びた赤色の落書きだけで、物の一つもありゃしない。
「うえ？」
物の一つもありゃしない。
……つまりは、全て持って行ったということで。今のイリは何も纏っていない訳で。認めたくはないが、着るものは無いらしい。
それはそうと、裸でクロスと向き合って会話をしていた事実に気付いた。途端に、今まで忘れていた分の恥ずかしさまでイリに襲い掛かってきた。
チラリとクロスを見る。いつもと変わらぬ様子でイリを見ていた。その目が自身の裸体を記憶してしまっている。
そう分かっていても、これ以上見られたくなくてイリは膝を抱えてうずくまる。
「何してんだ？」
純粋な疑問を浮かべるクロスに叫びたくなるが、叫んでも現状が好転することはないので恥辱に震えながらも大人しく説明する。
「あの店まで戻る。そこで適当な服でも見繕えばいいだろう」

説明を聞いたクロスは、面倒臭そうに顔を顰めてからイリに背中を向けて言った。そのまま歩き始めたので、人とすれ違わないように祈りつつイリは慌てて追う。

誰ともすれ違うことなくもと来た道を辿り、怪しいさ満点な店の前に戻ってきた。クロスはそのまま店のドアを開けて進む。中に人がいることは確定しきっているので入りたくないイリだが、入らぬことには衣服という安寧を得ることはできないので、腹を括ってクロスの後ろに続く。

店内に入ると、外装に違わぬ平凡ぶりを見せ付けた内装が目に入った。

壁に立てかけられている商品棚に、所狭しとばかりに詰め込まれた商品群。床も壁も、最低限な綺麗さを保っている。

そんな店内の一番奥に座っている強面な男が、ガラクタをいじりながらこちらに顔を向けていた。

「いらっしゃい…ってお前か。忘れ物でもあったか?」

察するにここの店主であろう男は、クロスに親しげに話しかける。対するクロスは首を振るだけの杜撰な対応であるが、店主は慣れているのか気分を害した様子も見せずに、訊いてもいない商品の解説を始める。

「この商品だがよ、この紐を引っ張るとバーンと弾が飛び出してな…何だこの子?」

店主は、クロスの背から頭だけを出して覗き込んでいるイリに気付いたようで、強面

な顔に困惑をうつす。
「コイツがさっきのだ」
微妙に説明になっていないクロスの言葉に、店主はますます眉を顰める。
このままクロスに説明を任せたら、グダグダになって何時までも全裸なままな気がしたイリは、体を隠したまま説明を始める。
「――――という訳でして、こちらに私の体を隠せるものがあればもらえないかと」
男に脅されたこと、その男になんやかんやあって服を盗られたことを話したイリは、本題とばかりに頭を下げてお願いした。
そんなイリの話を黙って聞いていた店主は、首を捻ってから背後にある扉をくぐってイリの視界から消えた。
待つこと数分、扉を開けて出てきた店長の腕には服が乗っていた。店長はその服を店の隅っこに置いて元の位置に戻った。
「悪いがそこで着替えてくれ」
そう言うと店長は後ろを向いてガラクタ遊びに興じ始めた。それを確認したイリは、クロスに絶対にこちらを向くな、と前置きしてから店の隅っこに行って着替え始めた。手持ち無沙汰になったクロスは、棚にある商品を物色しながらイリを待つ。
少し経って、クロスはイリの気配を背後に感じた。

大方、驚かそうしているのだろうと思ったクロスは振り向く。
視界に入ったのは黒っぽい姿。白の少女はどこへ行った？と少年が首を傾げてしまうの無理はない。
しかし、その姿こそ少女のもの。
灰色のフードで隠された、透き通るような白い髪がフードの奥で妖しく輝いていても。微妙にサイズの合わない布製の黒い上着が股下まで伸びていて、服に着られている感じは拭えなくても。反対に、膝下丈の灰色フレアスカートから覗くふくらはぎは黒で覆われていて、幼さの中に妖艶さを漂わせていてもだ。
少女は不安そうに瞳を揺らしてクロスを見上げている。その様だけが妙に子供っぽくて、彼女がイリだということを感じられた。
頭を掻きつつも、キチンと着られているか心配なのだろうか、と思ったクロスは声を掛ける。
「変じゃないぞ」
「そうですか……よかったぁ」
納得したように小さく息を吐くイリを見て、どうやら今回は正解らしい、とクロスも息を吐いた。
「ほぉ…やっぱり別嬪さんだな」

二人が息を吐いたタイミングで、いつの間にか近くでイリの顔を覗き込んでいた店主がしみじみと呟いた。
その声に反応したクロスは、相変わらず喧嘩を売る発言をする。
「浮気か？」
「…変な勘繰りが上手くなったじゃねえか」
どうしてこう、クロスさんは人の神経を逆なでするような発言をするんだろう。
呆れ顔でイリはそう思う。
幸いにして、店主は慣れている様で怒りはしなかったが、初対面の相手にやらかしたらと思うと気が気でない。イリ自身、自分には常識がないとは理解してきたが、もしかしたらクロスも常識がないのかもしれないと思いつつ、もしかしたらクロスの発言は普通なのかもしれないという疑念もある。
だから、機会を窺って店主に確かめてもらおうと思いつつも、落ち着ける格好になれたお礼を言う。
「気にすんな。お嬢ちゃんみたいな小さい子は大人に甘えときゃいいんだ」
店主はそう言って、フード越しにイリの頭を撫でる。
その感触のこそばゆさに、落ち着かない気持ちになるがジッとする。
ふと、クロスが腰につけているポーチを漁っているのに気付く。

「何をしているんですか？」
イリの声に反応し、クロスはポーチに目を落としながら答える。
「金を探してる」
「金？」
「ああ」
「???」
イリは金って何だろう、と首を傾げ、また知らない事だ、と溜め息を吐く。
クロスは挙動不審なイリに気付いた様子はなく、説明を求めるなら未だ頭を撫で続ける店主になるのだろうが、自分から非常識を名乗るのも気が引ける。
だが、大種族（人・魔・獣）を救うためなら自身の事など無視するべきだろう。
そう思い、心の中で深呼吸。そして、背後にいる店主に質問する。
「金って何ですか？」
…返事はない。
恐る恐る振り向くと、店主は洞穴の様に大きく口を開けて固まっていた。そう、まるで何かに怯えているような表情。
金というものは危険なのかもしれない。
そう思い再度振り向くと、クロスは金色の小石みたいなものを握っていた。

「これで足りるか？」
金色の小石を突き出してクロスは言う。
「あ…ああ」
店主は金色の小石を受け取る。
そのやり取りを二人に挟まれたまま目で追っていたイリは、とりあえず危険なものではなかったようだ、とホッとした。だが、店主の表情を思い出すと、金について訊くことは憚られる。
「宿を探すぞ」
イリがうんうんと悩んでいると、クロスが次の目的を告げる。
相変わらず、何を思ってその目的になったのか分からないが、意見できるほど旅慣れているわけではない。イリに出来ることといえば、水を向けないことくらいだろう。
それを理解しているイリは黙って着いていく事に徹する。
挨拶も何もしないで店を出たクロスに続き、頭だけ下げて後を追った。

薄暗い道を抜け、人の行き来もある大通りに辿り着いた。
クロスは軽く辺りを見渡してから、薪を担いでいる青年に声をかけた。
「仕事中すまないが、宿を取れる場所を知らないか？」
「着いてきてくれ」
それだけ告げて男は歩き出す。
道すがら青年はとりとめのない話をする。
村の特色、自分自身の事、昨今の情勢など、話す種が尽きることはないのかと不思議に思うくらいによく喋った。
宿に着いたのか、不意に話を止めた青年は振り返って目を細める。
「ところで、その子の髪を見せてくれないか？」
その声色は先ほどまでの調子であったが、イリに対する敵意だけは伝わってきた。

何故、敵意をぶつけられるか検討もつかないイリは、背後からクロスの背中を見上げる。クロスは、全てを知っていたかのように落ち着いて応えた。
「見せるまでもない。コイツの髪は白色だ」
その言葉を聞いた瞬間、青年の目にはっきりと嫌悪感が浮かんだ。
「泊めることは出来ない」
青年はそれだけ告げると、イリを睨み付けながら去っていく。
突然の豹変に置いてけぼりにされたイリは、馬鹿みたいにその背中を見つめることしか出来なかった。
「白い髪は忌み子の証なんだ」
憐憫の眼差しでイリを見つめながら、クロスは呟く。
「忌み…子？」
「ああ。昔、白い髪の女が起こした悲劇があったんだ」
遠い過去を振り返るようにしみじみとクロスは話す。そこらの大人よりは若さそうな少年がそんな目をするのはおかしいはずだが、この時のイリには、クロスは昔の悲劇とやらを見たことがあると確信した。
「その女は人のことを誰よりも考えていた。誰よりも考えていたからこそ、誰にもその考えは理解されなかった」

クロスは、イリに対する説明とも自身に対する独白とも受け取れる物言いを目を閉じながらつぶやく。

イリにはクロスがこの話に対して何を思っているかは分からない。この話は今のイリには理解できないから。誰よりも人のことを考えていたのなら、誰よりもその考えは人のためになるはずだ。

だが、そこで思考を捨ててはいけない。大前提として自分には一般常識というものが欠如しているのだから、自分の考えは白黒で、人の考えは白だ。故に疑うべきは自分。

「行くぞ。逆戻りだ」

そう言ってクロスは前を行く。その背中は大きくて堂々としている。

…今のイリに出来るのは、人生の先輩たる背中を追うことだけだ。